兒玉郡教育會報

第壹號

兒玉郡教育會報第壹號目次

○發刊の辭……一

○講演……二

一　時局に就て……東京帝國大學教授 法學博士　寺尾　亨君　二

二　體育所感……東京女子高等師範學校教授　井口あぐり君　一八

三　教育の基礎……子爵　加納　久宜君　三三

○本郡教育の概況……四二

一　學齡兒童就學に關する狀況……四三

二　小學校生徒出席に關する狀況……四四

三　小學校舍設備に關する狀況……四六

四　小學校兒童貯金に關する狀況……四七

五　實業學校に關する狀況……四八

六　教育費及基本財産に關する狀況……四九

七　學校衛生に關する狀況……五〇

八　教員講習會に關する狀況……五一

九　小學校に關する表彰……五四

○本會記事……五四

一　本會創立の起因及經過……五四

二　會務の報告……五五

三　會務日誌抜抄……五七

四　會計……六八

五　本會規則……六九

六　本會々員氏名……七二

埼玉県立浦和図書館
8115625
蔵書

L370.5-3

兒玉郡教育會報第壹號

（明治三十七年分）

發刊の辭

茲に會報第一號を發刊して創立以來の成績を報告するに當り、現在に於ける會務の方針につき一言表示し置かんとす。

從來多くの計畫が漠然たる研究の下に、初めより事業の全体に亘りて一時に着手せられ、階段を踏まずして一氣に飛躍せんと試みられたる結果、往々不成効に終りたるもの少からざるを見る、本會は此の實例に鑑み初めより大經綸を行はず、徒らに標榜せず、教育上至大の關係を有する極めて普通の問題にして今尚改良せらるべきものより着手し一個一個確實に整理し着々歩を進めて以て最後の大目的を貫徹せんとす。

既往の成績に就ては未だ著しき成効なしとせんも、豫定の計畫は悉く之を實行したれば、郡教育上多少の裨益ありたるを信ず、只會報の發行は時局のために其時期および體裁を變更するの已むを得ざるに至り、會員諸君の有益なる投書も空しく筐底に埋沒することゝなりたるは甚遺憾とするところなり。

目下に於て努むべき主要の問題は、時局に對する教育上の處置如何といふに在り、思ふに今回の如き千載一遇の大事變は獨り國民教育の方面のみならず、社會全般の進歩發達上に於ても亦千載一遇の最好機會を與ふるものなれば、之に處すべき適當の方法を講ずるは吾人の勤むべき當然の責務たり、本會は此問題に向て全力を傾注し大に貢献せんことを期す。

然りといへども、凡百の事業之を言ふは易く之を行ふは難し、如何なる言動も傍より之を見るときは多少の遺漏なき能はず、會員諸君は常に本會の行動に注意し、遠慮なく其意見を發表して本會の活動を促されんことを望む。

講演

法學博士　寺尾亨先生演說

◉時局に就て

私は張り出してもございます如く帝國大學に從事して居つて矢張り教育の一部に關係をして居ります、依つて此の教育會の御催しに係る講談は教育に關することを述べるべきでございますが、幹事の御注文がございまして、時局に付て少し話をするやうにと云ふことでございます、元來學問に從事して居る者が時事の話をすると云ふことは一般に避くべきでございます、併し私は既に是まで度々さう云ふ話も致しました、又今日の如き御席に出て私の專門のことを御話申しても餘り有益でもあるまいかと考へます、元來私は國際法の專門である、殊に今日の如き千載一遇、即ち日本開闢此の方未曾有の時期に際しては假令平生學問に從事して居る者でございましても國民として果して考付いたことがありまするならばそれを述べても決して差支はなからうと云ふ考へを持ちまして昨年以來此の問題を研究致して多少意見も發表致しましたので、世間より兎や角と批評も受けたくらゐでございます、それは其實昨年ぐらゐではないのでございます、餘り世間に發表しないのでございましたが、豫て斯う云ふ考へは持つて居ました、就中此の北清事件、即ち三十三年の支那の騒動でありまして、丁度此の際に露西亞が滿州に兵を送つて實際殆ど之を占領して仕舞つたと云ふ有樣になつて益々其經畫を進ませて殆ど憚らないことが目に見える有樣でございますから、其時代も多少同志の者と話し合ひまして當時の當局者に注意を致したこともございます其際は極々秘密に當局者に話をしたのでありまして、双方共に秘密を守りて居りましたから世間では誰も知らずに濟みましたが、其時代に出版したもの等もございまして多少新聞などには意見が出ましたが、竊に注意をしたことは餘り人が知りませぬ、さう云ふ行掛りもございます、殊に私の學問の國際法と申すのは諸君の中で御承知の御方も澤山ございませう、聽衆は澤山に御出である、御婦人方も子供衆もお爺さんもお婆さんも居らつしやるやうでありますから、少し柔かく御話する積りであります。

此の日本とか支那とか露西亞とかいふ總て國と國との間のことに關係して其國々が守るべき法律を調べてそれを研究するのが私の本分でございます、さう云ふ學問でございますから、一体其法律規則はどう云ふものであるかと云ふことを調べますと同時に總て今日の國の有樣はドウであるか、どう云ふ考へを待つて居るか、どう云ふ勢ひで進んで居るか、又從來は如何なる有樣であつたか、如何なる希望を持つて居るか、さう云ふことも矢張り調べねばならぬのである、それ等の所から多少此の問題を研究するに餘程緣故が近かつたので注意して居つたのであります、然るに露西亞の近頃の擧動は明に日本に對して餘程の害があるのである、ドウしても此の露西亞の擧動と云ふものは停めなくてはならぬと云ふことは苟も此の方の研究をして居る者、豫て注意をして居る者には早く分つたのである、尤も分つても言はない人もございますが、私などは差出ながら隨分それに付て物を言つたのである、それはどう云ふ譯かと云ふことを成るべく簡單に諸君に申上げます(圖を指す)日本は是だけである、露西亞は是からズツと是だけの所である、斯う云ふ國であつて、土地から見ますれば日本の何十倍もあつて迚も比較にならぬ所である、世界の一番廣い國である、所で元は僅か此の邊の國であつて都は此所であつたのであるが、それが遂に此の歐羅巴の北部に擴つた、又數百年前此の邊の開けない時代にズツと此の邊を取つて仕舞つた、所が露西亞の國は餘程北の方に都を持つて居つて日本から比べるとズツと此の方の寒い所であつてロクに商賣が出來ぬ、さう云ふ國であるから南に出て商賣して十分に發展すれば國が進んで來やうと云ふのが露西亞人全体の考へである、それは商賣上と言へば宜いがさうばかりでない、元來露西亞人の考へは古い考へであつて歐羅巴の中ではあるが、外の國の人は是は野蠻であると言つて居る、さう云ふ譯で只昔の考へを持つて土地を取つてさうして自分が世界を一統しやう、一統せずともセメて大部分を自分の支配下に置かうと云ふ考へであつて其考へが今日迄殘つて居る、昔蒙古からして成吉思汗といふ人が起つた、是は義經と云ふ說もあつたがさうではない、其人が是から攻入つて之を荒らして此所に攻入つたのである、それから其外に歷山王とか云ふ人なども斯ふ攻めて行つた、又其後にも澤山ありますが、要するに昔の人は土地を攻取る爲に軍をする、それが國の目的であると云ふ考へを抱いて居つた、其考へが矢張り露西亞には殘つて居る、今日は歐羅巴の中ではあるけれども、歐羅巴人が野蠻人と

言ふくらい古い所の考へをまだ今日持つて居る、尤も之が露西亞の彼のペートル大帝の遺志であるといふ、南の方まで出て世界を一統すると云ふのがペートル大帝の遺言ではないと云ふ説が多い、良し遺言であつたとした所で只其時代の露西亞人一般の考へを述べたものである、それを言立にして數百年來常に其實行を續けて居るのである其證據には先刻述べた通り西伯利を取つた後それから續いて百年此の方、即ち前世紀中十九世紀中に於て露西亞は始終此方面に出て來やうとしたのである、其計畫は皆人の知つて居ることであります、それはどう云ふ工合であつたかと申せば此の西方亞細亞の方面で土耳古が歐羅巴の中に差出て居つて土耳古と露西亞は境を接して居るからして、昔から露土の關係があつたのである、其關係のあることゝからして露西亞はズン〳〵出て來やうとして一番初めに土耳古に手を着けた、それは最も古くからでありますが、就中前世紀の百年の間は始終之に目を掛けたのである、所が外の國が承知しない、殊に英吉利が承知しないで此事に付ては色々約束を結んで回ウ〳〵今日では露西亞は獨りでは此所から出ることは出來なくなつた、是が有名なる歐羅巴の東邦問題、或は東歐問題と云ふものである、そこで露西亞は今度は外の所へ出やうと云ふ考へを持つて、支那の此の邊に黑龍江と云ふ河があります、此の河の此の邊に手を着けたそれで支那が非常に困つた、困つた爲に數十年來條約をして此所に境を極めたから、容易に出られないやうになつて仕舞つた、そこで今度は此の山の方面から支那の方に出て來やうと考へた、所で此の邊には境の區別が十分でない、又支那も此の邊は開けない部分であるから少しは呉れたが、支那は都の方面の良い所はナカ〳〵呉れない、それから今度は此のアフガニスタンの方面に出て來やうと云ふ考へを持つて來た、所が此の所には英吉利が出て來て居つた、英吉利は印度の斯ふ云ふ廣い所を取つて居て、此の所へ露西亞が出て來ると英吉利の邪魔になるから英吉利が妨げるのである、且此の所へ出やうと云ふのは陸路であるから容易でない、それで他の一方は日本の方面に向つて樺太方面或は浦鹽斯德方面から出て來やうと云ふ考へを持つた、又朝鮮に出樣と云ふ考へが出て來たのである、ところで先年から日本と露西亞との間に朝鮮問題が屢起つたのである、所で朝鮮は又日本の爲に餘程必要な所である、

朝鮮と日本とは此の圖で見ると間が分らぬくらゐ近付いて居つて日本の爲めに最も必要である、之を露西亞に取られるとチカ焼けになるから大切である、それで此の朝鮮の獨立と云ふ爲に二十七八年の戰爭をしたくらゐである、斯う云ふ有樣で日露は常に朝鮮に勢力を爭ふた結果日本と朝鮮と申合せが出來たのであるそれでも彼は隙があらば出て來やうと思つて居つた、所が亦支那との關係である、兎に角に支那は世界の大國である、露西亞に次いで舊大陸の方では一番大きな國であるからして是は容易に手が着けられなかつた、獨り露西亞ばかりでなく、外の國も支那は大きな國民であると言つて恐れて居つた、恐れて居つた所が日本人が今より十年前、明治二十七八年に於て朝鮮の事から戰爭してネツタイト息に勝つて仕舞つた、此の大きな國も當つて見れば存外弱かつた、話に言ふ如く驢馬が聲を出して居る間は大きな聲だから恐ろしいと思つて、居つたが一度び驢馬が手を出すと弱かつたから猛獸が皆寄つて食つたと云ふことと同じ話で、遂に當つて見ると弱かつたから英吉利なり佛蘭西なり獨逸なり露西亞なりの各國が支那と云ふものに目を着けた、日本は取れないからドウも仕方がない、支那は弱いから此の方を取らうと云ふ考へが起つたのである、さうして昔土耳古の方のヤカマシク騷いだ問題は中止して置いて世界の大きな外交問題は支那日本朝鮮に關係の極東の方面に集つて來た、さう集つて來た際に彼等の爲には幸であつて日本の爲には少し早過ぎたか知らぬが、北清事件と云ふ騷動が三十三年に支那に起つたのである、是は獨乙なぞが彼に起させたとか何とか云ふ話もあるが、兎に角に其以前に於て露西亞は日本から振取つた所の遼東半島即ち旅順大連を取り、獨逸は膠州灣を租借の名義で取り、英吉利は威海衛を取り、佛蘭西は南の方の廣州灣を借ると云ふ工合に銘々が手を着けたのである、手を着けて居つた其際に此の北清事件、義和團事件が起つて各國が銘々自國の人民を保護し或は公使館員を助けると云ふことであつた、即ち公使館の人々は北京に籠城して居つたと云ふので就中日本は多くの兵隊を出した、英吉利も露西亞も獨逸も佛蘭西も出したのである、詰り公使館を救ふに一生懸命であつた、露西亞の兵隊は日本より少かつた、其仕事をして居る間に露西亞はズツと此の滿州を取つた、此の間は日本から比べると幾倍あるか知らぬが隨分廣い、此の部分を先づズツと取つて其所へ兵を入れて仕舞つ、

たゞそれは其以前から鐵道敷設權を持つて居つて鐵道を敷いて居つたので、其鐵道を支那の馬賊が毀すとか、一揆が起つて毀すとか、露西亞の人民が大變害を受けるから其亂を平げると云ふ名義で大變に人を入れた、只人を入れただけでなく、ズン〳〵計畫して其所に大きな街を拵へ、大きな兵隊小屋を拵へ、種々な鐵道を敷く、斯う云ふ有樣で各國が北清事件の仕事をして居る間に自分は桝掘りをした、然も十倍も大きな桝掘りをした、さう云ふ譯で各國の兵が引かうと云ふ際に當つても露西亞は滿州から引かない、モウ騒動が濟んだ上は引くべきであるが、引かないで露西亞は露西亞自身に支那と直接の談判をして此の所に兵を置かうと考へた、それが三十三年の北清事件の終り頃である、さうして實際其計畫を見ると永遠の計畫であつて一時占領し、一時騒動が起つたから其所に兵隊を入れた譯でない、自分の物として何十億と云ふ金を入れてネツカり計畫して仕舞つた、そこで各國は皆兵を引いたが、滿州だけは引きさうもない、此の滿州の兵を引かして支那に還さしむるのが日本の考へであつた、それに付ては露西亞と支那との條約だけに任せられないから各國相寄つてそれに立入つたのである、立入つたからトウ〳〵露西亞は兵を引かうと約束した、即ち期限を定めて三度に兵を引かうと云ふことに據ろなく約束させられた、所が實際引かないのである、私共が注意したのは其約束をさせられた前である、三十三年に其模樣が見えたから日本は英吉利其外の國と一緒になつて其條約を結ばせて兵を引く約束だけはしたが、元來露西亞には決して引く積りはない、引く積りがないからして段々に長引いて遂に今に至つても引かない、引かぬどころでなく、力を持つて取つた積りである、引くと云ふことは口先きばかりで已むを得ず約束したのである、そこで日本は是は是非引かせなくてはならぬ、若し彼が引かないとしても是は支那のものとして置いて呉れ、決じて露西亞のものとしては困ると云ふことを日本が主張したのである。

そこでなぜ日本がさう云ふことを言ふか、なぜそれが今日の軍になつた本であるか、其軍の原因を說くのである、何故に日本が隣の喧嘩に立入つて命掛け、即ち國家を賭けて軍をするか其說明を今日はせねばならぬ、それは諸君は御承知であらうが少し說明します、それからして今日日本が軍をした目的と云ふものが出て來る、從つて今日の國民の考へ、又將來に於ての國民の考へは先程シツカリせねばならぬといふことが出て來るのである、此の日本は先刻述べました如く世界に比べると誠に小さな國である、小さな國であるけれども、幸にして五十年此の方、即ち開國して以來維新と云ふ日本に取つて大革命があつた此の方着々日本は進んで來たのである、又國自身が小さくとも決して進まぬと云ふことはない、小さいからそれで安んずるそれで滿足すると云ふことは到底出來ない、私し是が五十年前、即ち嘉永安政頃の開けない日本であつて例へば伊豆の八丈島と云ふやうな日本の本島から比べると小さな離れ島であつて全く離れて居つたとか、若くは日光の山の中の交通の無い昔の一軒家であつたならば宜いが、既に五十年此の方世界の爲めに開かれて居る、年寄りの方は御承知であらうが、鎖國とか、開國とか勤王とか佐幕とか云ふ大騒ぎの末遂に據ろなく日本を開いたのである、開いて見ると是非日本は外の國と同じ地位に行かんければならぬ、タツタ一人で隣付合もしない、人付合もしないと貧乏人は貧乏人で濟むが、外と並々の交際をするに當り其相手が十倍も富んで居る、然もそれが一軒でない、村中悉く金をもつて居つて自分一人貧乏人であれば到底其村人と立駢んで行かれぬ、貧乏人が多ければ宜いが一人ではいかぬ、ドウしても此の國を進なければならぬ、外の國と一樣になければならぬ、所が金持ちの度合が極く少く積つても十分一と云ふ統計であります、確か大隈伯は曾て六十三分一と云ふ割合を立てられたが、それはドウして立てたか知らぬ、世界各國の富を數字に表はして其平均が六十三であれば、日本は其一である是は土地の廣さではない、富の位である、さう云ふ有樣であるから世界に立つて行くことが出來ない、さうして日本の人口はドウかと云ふと、今は四千萬餘になつて居るが、僅か維新後に調べたのは三千萬と云ふやうなことであつた、何でも一箇年に五十萬以上多くなつて居る、人の多くなることは決して惡いことではない、極く繁昌するのである、さう云ふ工合に繁殖して殆ど世界の中で此のくらゐ人口が多くなる國は少い、此の邊（圖を指す）の島などは割合に多いが、是は和蘭領の『ヂヤヴア』であつて元々極く人口の少なかつた所である所が日本は外の國から比べると年に五十萬づつも殖る、さうして此のくらゐな小さな所に四千萬人も居る、佛蘭西本國の人口よりも日本の方が多い、獨乙から見れば少し少ない、それから英吉利本國の人口より多い、

さう云ふ有様であつてさうしてドン〳〵殖て行くから
して、詰り土地自身としても殆ど住ふことが出來なく
なつて來る、又住ふだけは住つても田などを多分に作
ることが出來ない、迚も日本は外の國の人と同じやう
な奢りをして同じやうな生活をして行く土地が無い、
土地が無いからしてドウしても日本人民は外に行つて
殖民して百姓をするとか、或は商賣をするとか、或は工
業をするとかして外の國に向つて日本人民は發展して
行かなければならぬのである、若し神があつて神が人
間を拵へて是だけ生れて行くものとすれば僅の人口で
大きな土地を持つて居る、それは亞米利加の如きは稀
薄な人口である、さう云ふ所に勝手に出て行つて土地
を耕し勝手に商賣も勝手に贅澤することが出來なけれ
ばならぬ然るに日本人は斯る必要を以て居ながら其往
所が無い之に付ては諸君は一々御承知のないことがあ
りませう、少し例を引きますが、日本人は能く布哇に出
稼ぎする、是は先年來條約に依り契約勞働者を送つた
ので現に六萬ばかりの人が這入つて居る、此の目に見
ないくらゐの小さな島に六萬ぐらゐの出稼人が行つ
て居る、所が先年布哇が米國に合併せれらてから亞米
利加の法律の上、或は亞米利加の政略の上、日本の約
束勞働者を入れることが出來ないと言つて制限されて
今ではタンと行かれない、それで日本人は桑港の方面
に澤山行つて居る、それで喰詰めの書生などが澤山行
つて甚だ日本人の評判の惡い所であります、それから
支那も矢張り人口が多いから支那人も澤山外に出て居
る、亞米利加では支那人は不評判である、生活の度が
違つて然も不潔である、又マルで宗教も人種も違つて
居る、さう云ふ所から歐羅巴人の目から見ると野蠻人
に見ゆる、殊に色が違つて居るから餘程下等の人物と
して亞米利加人は支那人を好まない、そこで日本人が
亦支那人と同じ色であるから兎に角く日本人を喜ばな
い、それに日本人のよい者は行かないで喰詰め者が行
くから甚だ評判が惡い、向ふは土地が餘るほどあるか
ら眞面目のように農業などを入れやうとしても人種が
違ふとか、宗教が違ふとか云ふことで日本人はナカ
〳〵中の方に這入れない、州に依つては日本を入れな
い所がある、それから又外の歐羅巴人には土地を買は
せるが、日本人支那人には土地を渡さぬ所が澤山ある、
亞米利加は州に依つて法律が違つて居る、それから此
のロッキー山を越ゆて向ふの方は幾らか旅費が多く掛
るからコチラの方に多い、それで此邊ではヂャパニー

スと云はないで、ヂチップと云ふ輕蔑の言葉で呼んで
動もすると之を排斥する法律が出て來る、そこで今度
は日本人はコチラの加奈陀の方に行き出した、例のビ
クトリヤとかシヤトルとか、ヴケンクトヴアーとか云
ふ此の邊から這入る此の方は合衆國から見ると這入り
安いから行きます、コチラは未だ開けぬ所である為ら
十分に仕事が無い、まだそれほど澤山は行かないが多
少行つた所で此の加奈陀に於ても日本人を入れることを
望まぬのである、加奈陀の政廳でも支那人と同じく
日本人排斥の法律を出さうとした、加奈陀は元來英吉
利の領分であるが、此の所には亦此の所だけの政府が
あるからさう云ふ法律を出さうとした、そこで日本政
府は骨を折つてそれを出させぬやうにして居るが、一
般に加奈陀の人の考へは日本人は入らせたくないので
ある、それで斯の如く多い日本の人間が仕方がないが
ら今度は南の方に行かうと云ふことでやつて居る、コ
チラの方には斯う云ふ大きな英吉利の領地があるか
ら、此の濠洲に出て少し仕事をしやうとする、此の所
で眞珠を採るとか云ふ出稼ぎに行く、所が此の所にも
矢張り英吉利の殖民地の政廳があつて此の政廳では日
ウ〳〵日本人を入れないといふ法律を出した、是は表
面から入れないとは言はないが、横文字五十字以上書
ける者でなければ此の所に這入ることが出來ないとし
た、歐羅巴人であれば英吉利語でも佛蘭西語でも獨逸
語でも或は伊太利語でも西班牙語でも横文字でさへあ
れば宜いが、日本の勞働者で横文字五十字以上書ける
ものは容易に無い、即ち是は日本人を支那人とを排斥
する法律なのである、さう云ふ工合であつて此の方面
にも行けないのである、そこで日本人が發展するなら
ば同じ人種であつて昔から幾らか似た風俗を持つて同
じ主義を持つて居る支那か朝鮮の方面に向つて仕事を
せねばならぬ、是は日本からは最も近く人が少くして
然も土地は隨分富んで耕作の善く出來る滿州なり朝鮮
なりの所……朝鮮は決して惡い國でない、さう云ふ方
面に行つて百姓をし、又總ての品物を入れて商賣をせ
ねばならぬ、若しそれが出來なかつたとしたならば日
本人は世界に於て立場が無くなつて仕舞ふ、永來永劫
十年二十年三十年五十年位の間ではない、何十年何百
年、何千年何萬年の間浮ぶ瀬がないのである、若し此
方面の土地が露西亞人の手に落ちて仕舞へば亞米利加
に於けるが如く濠洲に於ける如く日本人が排斥せらるゝ
のである、さうすると日本人の立場が無くなつてドウ

しても日本が進んで行くことが出來ない、此の人間と云ふ者は諸君でも同じことであるが、少しでも勉強して身代を儲け出さうと云ふ考へが無くてはならぬ、親讓りのもので我慢しても親讓りのものが少ければドウか、それで滿足すればいつしか身代は無くなる、座して食へば山も空しである、同じ地位に居やうと思ふても進む考へでなければならぬ、況や今までは外より大變劣つて居るから是と同じやうにならなければならぬ、それは直く一足飛びに同じことになれないとしても稍々それに近い地位にはドウしても進まなければならぬ、進まなければ亡ぶるのである、其亡ぶることになるやうなことを露西亞からされたのである、それであるから露西亞を滿州から除いて之を支那のものにして置かねばならぬ、日本は其點に於て一つの死活問題を持つて居ると言はるゝのである、是れが戰爭を爲すに付いての積極的の理由である、極論すれば色々辭柄もあらうが、無論今日は進む方の考へが必要である、所が尙ほ一歩迫つた問題がある、是は先刻述べました如く露西亞は南に出て來なければならぬ地位である、其目的で滿州を實際取つて仕舞つた、滿州を取ると此の朝鮮も僅なものである、アチラも露西亞、コチラも露西亞となると朝鮮の如きは直ぐ露西亞の力で壓服されて仕舞ふ、朝鮮は事大主義で強い方に從ふのである、露西亞が是だけの力を得て居れば直ぐ露西亞の方に傾いて其勢力の下に立つて仕舞ふ、さうしてイツしか朝鮮が取られて仕舞ふ、さうすると此の靑いしるし（圖を指す）がこゝまで來る、若し是が斯うなつたならばそれこそ昔權太州と千島と換へたやうなもので、向ふの粟粒のものとコチラの四國九州は直ぐ侵されるのである此の間に對馬がある、是は軍事上必要であるが、朝鮮を取られるとデカ燒けになる、即ち大火事の風下と同じことである、そこで斯うなつて來ると日本は發展が出來ないばかりでなく、遂に日本が取られて仕舞ふかも知れぬ、尤も諸君も同じことでありませうが、私共の考へは苟も日本の人間は子供であらうが、お婆さんであらふが、女であらふがお爺さんであらふが一人でも活きて居る間は外國の者にオメ〳〵取られることはせぬ積りである、併ながらナカ〳〵さうはいかぬ、金の力や武器の力に對しては一人で威張つて居つてもいかぬ、イツしか取られないとも限らない、若し取られないとしても全く勢力は無い、ドウにも斯うにも成立たぬ、外に出てドコへ行つても肩を突かれ頭を叩かれるのである、さう云ふ譯で日本は活きるか死ぬかの境であるから據ろなく今度の軍をせねばならぬのである。

抑々此の軍をすると云ふことは容易ならぬことである元來私共の學問から申しても國と國との間の法律があつて日本には日本の法律があつて人民が互に掴合つて喧嘩をしない、喧嘩して惡い者は之を罰する法律があつて罰せられるから喧嘩しない、人殺もしない、それと同じことで矢張り國の間に法律があつて其法律に從つて軍なぞはしない、是が國際法元來の目的である、又國際法ばかりでない、此の世界の人間が一緒に生活して幸福を得やうと云ふには勿論平和を得なければならぬ、好んで軍をする譯でない、又宗敎の方から言つても軍は容易にされるものでない、所が實際今日まで軍は尙ほ存在して居る、是は據ろなく存在して居る、又或る場合には據ろなく戰爭をせねばならぬ、我々個人の間には滅多に據ろなく喧嘩をすることはないけれども昔の侍の間に於て或は今でも俠客の間に於ては據ろなく喧嘩をする、此の據ろないにも多少據ろあることがある、しかし或る場合には自分の力を用ゐることがある、是は諸君は法律家でないから御話致しますが人を罰する刑法の上に於て正當防衛と云ふことがあつて或る場合には人を殺しても罪にならぬことがある、それはどう云ふことかと云ふと、泥棒が這入つて又物を持つて向つて來た場合にコチラが又鍬でも鉈でも持つて向つて來る者を殺して仕舞ふ、向ふが物を取りに來てコチラが命が危いと云ふ場合はそれを殺しても無罪である、即ち自分で自分の身体を防ぎ、又品物を取られないやうにすることは人の權利として許されて居る、それは國に於ても許されて居る、併し是は成るべくしてはならぬ、さう云ふ場合に避けられるなら避くるのである、アトで泥棒でも人殺しでも捕へるから己れが避けられるなら避くるが宜い正當防衛があると言つて滅多に泥棒を殺してはいかぬ、それはなぜかと云ふと、アトに法律と云ふものがあり、警察官があつて其泥棒を捉へてそれから裁判して處罰するからである即ち上に法律と云ふものが明に立つて居つて、それで罰せらるゝから、此の正當防衛と云ふことは餘程狹くして滅多に用ゐてはならぬことになつて居る、所が將來世界はドウなるか分らぬが、今日までの有樣では銘々獨立して銘々武器を持つて居る、軍艦や大砲を持つて居つて其一つの國が惡いことをした時に他の國が好

意で制して呉れ、或は泥棒や人殺しがあつて避けらるゝ時は之を捉へて罰して呉れる者は無い、そこで國と國との間には正當防衛と同じく自衛權と云ふ權利がある、此の自衛權は我々の間の正當防衛よりモツと廣く用ゐらるゝのである、一度び負けて仕舞て土地でも取られたなら容易に取返へしは付かない、日本が支那の爲に滿州を取戻すのは義俠であるが、併し支那の爲めばかりでない日本の爲もある、さう云ふ譯で自衛權と云ふ點からして日本は之をやらなければならぬ、そこで此の戰爭は一つの自衛權、即ち國が危く國の發達が出來ないから其場合にはドウしても命掛けで軍をせねばならぬ山の中どころでない、島であつて政府も巡査も無い所である、其所へ強い奴が三三人居つて殺さるれば殺され損であると同じことで殺されてはならぬと云ふ其時に據ろなく個人の正當防衛と同じやうに國家の自衛權と云ふもので軍をすることが出來るのである、又國として立つて居る以上はドウしても其軍をせねばならぬ、若しやらなければ外の國に取られて仕舞ふから此のくらゐ難儀なことはない、日本人は餘程寛大であるから一時滿東半島を取つてもナカ〳〵立派にやつたやうであるが、外の國が攻取つて仕舞つたらドノくらゐヒドイ目に遇ふか知れぬ、我々自身は直接の害は被らぬか知らぬが、五十年或は百年の後……

さうまでは行かぬ二十年ぐらゐの將來に於て是が取られるとになつたら我々の次の人、又其次の人に對して我々は何の面目があるか、依つて此の際軍をせねばならぬ、然も彼は其計畫をして益々進んで來たことが此の二兩年以前から明になつた、それから又頻りに軍艦を拵へた、近頃旅順口に來て居る艦隊は是は一年以前までは至つて勸かつたが、此日本と云ふ相手が出來てから其計畫をした、此の計畫を始めましたのは三十三年の北清事件の前に此の海軍を擴張したのである、從來日本は(圖を示す)此のくらゐの長さの海軍力であつた、所が露西亞は東洋には是より下の艦隊力ほか無かつた、それが日本が漸々進んで行く中に露西亞は此のくらゐの長さのものを拵へた、是は畢竟日本に當る積りであつて時があればコチラからでなく向ふから仕掛けると云ふことは明になつて居つた、若し彼等に都合が宜く日本に都合が惡い時に押掛けられたら受身の軍は難儀である彼の對馬などに居る人は支那朝鮮の關係があつて外國に襲はれるから對馬の人は非常に敵慨心が強い、それは昔から始終苦みを受けて居る、財産は取られ人は殺され女は辱められると云ふ苦みを受けて居るから此の度の露西亞との戰爭に於ても老人に至るまで非常に敵慨心を持つて居ることはさう云ふことから起つて居る、斯の如き譯であつて已むを得ず戰爭となつて遂に今日までに立至つたのであります、

さてさう云ふ譯のものであるから是からはドウするが宜いか、軍は始つた、其軍は勝である、それは日本人は愛國心が強く、平生の氣性が盛んである、又軍隊の訓練が能く出來て居る、國民は擧國一致して此の後援を爲して居るのである、故に幸にして今日までの軍は非常な好成績である、實は此の海戰の方は餘程氣遣はしいのであつたけれども、幸にして我が忠勇なる海軍や人の戰功に依つて斯の如く都合宜く行つたのである、モウ誰も旅順は長くは持たぬと考へて居る、只それは時の問題で早いか遲いかである、又陸戰に於ては日本の陸軍は餘程精練して居る、それは海軍より組織が古くして訓練が積んで居る、露西亞の陸軍は名は高いが、今日は日本に及ばぬから軍は確に勝つと云ふことはお互に確信して居る、諸君の中に負けると云ふ考へのある人は一人も無いでせう、併し近頃の軍はナカ〳〵容易なことでない、金が非常に掛ります、此の軍をするに付ては果して軍資金が出來るや否やと云ふことは一般の人が考へたのである、所が假令金が續かずとも已むを得ぬ場合には軍をせねばならぬ、勿論今度の場合は已むを得ぬ場合ではあるが軍は出來やう、兵力も十分にあり、又金も出せば出せぬことはないと云ふことで遂に軍を決じたのである、所が容易な譯でない、今日積られてあるのは今年中に五億とか六億とか云ふくらゐである、又來年は七億とか八億とか、又來年はドレだけとか云ふことである、要するに二十億ぐらゐは掛ると考へねばならぬ、是が當年一パイで片付けばたやすい、それは望ましきことであるけれども此の露西亞の大國を引受けて日本が全國の力を擧げて掛るのであるから二三年は掛ると云ふ覺悟が國民に無くてはならぬ、若し早く終つたら是は勿怪の幸と心得ねばならぬ、茲に於て愈々着手することは國庫の債券を募るとか、或は增稅することになつて來た、所が多少困難である、又軍が始まると雖も控へ目になるから世の中が不景氣になる、既に不景氣であつたのが軍の爲に愈々不景氣になる傾きがある、是は據ろないことである、假令一時不景氣になつた所で勝つと云ふ見込みが立つて居る軍であれば勝つた後は亦非常に榮へる

と云ふことを考へねばならぬ、其間辛抱せねばならぬ其間持耐ねねばならぬ、現に二十七八年の日清戰爭の後には戰爭に勝つた爲にチツと奢りが長じたとか、又其結果として一時榮へたものが遂に亦不景氣を來したと云ふことがあるが、兎に角に日本國は十年以前の日本國より今日は餘程繁昌して居る、それはツマラヌ泡沫會社や銀行の破產したのは隨分ありますが、是は元が嘘で成立つて居つて本當に成立つて居らぬからである、コンなものが倒れても決して一般日本の富が下つたものとは言はれない、總て海外に出す產物を統計に據つて計算しても、又總ての租稅にしても、或は行政の費用にしても市町村の費用にしても、一家の生活にしても十年以前よりは非常に膨張して居るが、其十年以前と苦みの度に於ては格別變つたふとはないのみならず、現金とか總ての財產から言へば確に殖て居る、それは何倍になつて居るか統計は分りませぬが、非常に高いのである、日本は外國貿易が二十七八年の戰爭に勝つた後に非常に進んで居る、今日のやうに軍は濟ますとも勝つて居れば相當に物の商賣は出來ます、其間やつて居つてアトで大いに榮へる爲に辛抱せねばならぬ。

此の辛抱と云ふことに付てチツト誤解があるやうであるから、私は此の點を少し述べやうと思ひます、斯ふ云ふ大戰爭をするとなると皆儉約をせねばならぬ、各勤儉貯蓄をせねばならぬ、或は恤兵の爲に金を出さねばならぬと言つて何れも儉約をする、儉約は決して惡いことでない、皆儉約して貯蓄する考へをせねばならぬが、餘り是が極端になつて儉約をする爲に仕事をせぬとか、或は不景氣〳〵と言つて非常な儉約をする爲に總ての仕事が止つて仕舞つて働きが平生より少くなることであつては大變である、聞く所に依ると一村擧つて粥を食ふとか鹽を舐つて居ると云ふことにして成るべく金を使はない考へをして居る、さうして一方に於ては多少の產物があつても働いてそれを拵へて見た所が賣れないからいけない、又都會などでは色々な物を拵へて居る、それは都會に限らず此の邊でも製造がありませうが、それを製造した所がサツパリ賣れない賣れないから製造が止つて仕舞つて職人が皆暇になる、皆でなくとも幾人か減らされる、さう云ふ譯で仕事が無くなつて來る、其間遊んでさうしてマヅイものを食つて居らねばならぬ、さうすると先きの御演說のやうに身体などは餘程弱くなる、チョット是は誤解し易いのである、例へば昔の飢饉年か何かのやうに成るべく儉約して物を食はずして粥を啜つて居れば宜いとか、或は菜の葉を食つたり草の根を食つて居ると云ふやうな考へではいかぬ、それでは働く力が無くなつて自然貧乏する、私などは貧乏士族の子でありますが維新の頃士族が祿を離れたことは諸君御承知であらうが其時は一般の士族は何も職業を持たぬからして成るべく儉約をするが宜い、儉約をして居れば矢張り昔の通り暮さるゝと思つて儉約して火にもあたらぬ樣にし、食物を減ずる樣にしたのであるが今日の世の中に仕事もせず働きも出來ない者が立つて立派に行き得るかドウか、さう云ふ場合には一つ奮發して祿に離れたら躰で働くとか頭を使ふとか種々の方面に働かねばならぬ昔は一つの階級制度があつて金も持てない、進むことも出來ないが、それが破れたからドンナにでも進める、日本ばかりでない、世界にまで出てやらうと云ふ世の中になつたから盛んにやつて行くと云ふ考へを持つた者は進んだのである、又それを持たぬ者は退いたのである、其時ヂツトして何もせぬ者は一番困つたのである、それで今日此の大戰爭を目の前に控へて居つて益々軍費を作らなくてはならぬ、ドンなに苦んでも之を支へて行くと云ふには無論平生より餘分に働く、餘分に働くに付ては食物などは餘計に食ふて宜い、食へないと云ふことはない、食へないと云ふのは働かないから食へない、働けば食へるものである、近頃渡邊國武と云ふ人が言はれたことが新聞などにあるが、ドウも此の際は人が餘り消極主義である、此の際は大いに飲んで大いに食ふて大に働くが宜いと。大に飲むには及ばぬかも知らぬが、平生通りか或はそれより少し控へて居れば宜い、必ず酒も煙草も止めて仕舞はなくとも宜い、それより餘計働く方が宜い、此の邊は最も養蠶の多い所である、養蠶の多い所であるから男が其桑畑を耕すに付ては平生は先づ假りに一日八九時間働いて居るなら其働きを何時間か增す、即ち假りに百鍬だけ起して鄭寧にやつたものならそれを百十五鍬起して肥料も餘計やる、五度やつたものは五度半六度やり、さうして桑も平生より能く拵へ、又蠶を飼うにしても種紙の在らん限り飼ひ、今まで十枚飼つたものは十一枚飼ふ考へを持つて行かねばならぬ、それを爲すには平生より少し餘計働き食物も多いかも知れぬが、それは何でもない、全國の人がさう云ふ考へを持つて働きますと今までよりは五分なり一割なり餘計に物が出來

る、例へば一年に日本の生産高が拾億とした所で直ぐ一億ぐらゐはそれから出て來る、さうして一方から言ふと十分に産物が出るを後の準備になる急に沢山と拵へると言つても働き癖が付いて居ないから働けない、又總ての點の發達が出來ないから今やつて置けば癖が付いて來る、又多少産物が溜つて宜い、溜まるに付ては或は反對説があつて資本が無いと言ふが、必ず資本が無くとも出來る、又資本が無ければ資本を入れる途がある、此の邊で製造する絲の如き日本第一の重要産物であるから今の如きことが直ぐ行はれますが、所に依つてはさう云ふやうに行かぬ所がある、又あつてもそれほど進歩しないから或は場所に依つては外の製造をやらなければならぬが、兎に角外に向つて出る所の産物を造ることをせねばならぬ、今までの如く内國人の需要品を作つて交換して居るのは眞正の工業でない之を商工業と思ふて居るのは間違ひである、眞の商業は外國向の物を作つて外へ向つて商賣せねばならぬ、そこで若し新たな工藝品を造るならば其稽古をさせる稽古は半年か一年掛りますから金が無くとも遊んで居るより宜いから其稽古をやる、其稽古の爲めにでも働けば身体の爲め經濟の爲に宜いから之を奬勵しなければならぬ、又品物が夥く出來て資本が足らなければ場合に依ては有益な製作品なら外資を澤山入れても宜い、果して資産を入れて儲かる見込みのあるものは少々高い利息の金を借りてやつても宜い、兎に角斯ふ云ふ點に付ては儉約すれば宜いと云ふ古い考へが一般の人の頭に這入つてるのに困る、殊に要路に立つて居る人とか、或は日本の所謂從來の經濟家、殊に老人は儉約すればそれが經濟である、物は拵へぬでも奢らぬのが經濟であると考へて、さう云ふことを隨分立派な人が説くことがある、古い實業家古い金持ちは一般にさう云ふのである、私共に言はせるとそれは過去の人である、即ち以前の人であつて今日の新しい日本人ではない、さう云ふ人が大きな考へを起して日本が世界の日本になる爲の軍であると云ふことを知つて、さうして社會的の實業もし、世界的の生活をして行く考へが付いたなら、此の際に於て一時は苦しくとも、決して支へることが出來ないと云ふことはない、甚しきに至つては此等の老人の言葉にはマア教育などは遠い、是は結果が直にないから暫く止めて置くが宜いと云ふ怪からぬ話がある、日本が今まで急に進んで來て斯の如く西洋人から驚かるゝ如く進歩したのは種々の點もあらうが、基く所は教育であると言つても宜い、其證據は二十七八年の戰役に日本が支那に勝つた、海軍の力、即ち艦と云ふものは支那の方が強かつた、鎮遠定遠のやうな甲鐵艦は日本に無かつた、又裝甲の軍艦も沢山に無いと云ふ心細い話であつたが、それでも勝つた、又今度の露西亞も昔から大國で兵も多く強いのであるが、新進國の日本が勝つて居る、是は勿論日本人は從來の氣性があるけれども、學術の進歩に外ならぬのである、海軍も陸軍も學術的の技術を持つて居つて、皆が其教育を受けて居るから今度の勝も軍も出來たのである、それから實業の點に於ても稍々進んで來た、近頃海外に輸出する品物、就中絲其他羽二重は福井の方面では非常に發達して輸出品が多くなつた、其外色々の工藝品とか總ての雜貨も大分出ますが、是等がズン〳〵行くのは矢張り新しい教育を受けた所の人、即ち商業學校なり其他の學校なりの人がそれに從事し、又一般の人が必要を感じてさうして海外的事業の心を養成したからである、まだ今日は外と比べてそ富の度合は低いが、以前に比べて見ると著しく進歩したことは畢竟教育の力である、然るに動もすると教育は目の前に効果が見ないから是はドウでも宜い、暫く第二に置くと云ふ人がある、諸君はドウか知りませぬが、私共は間接に時々聞くことである、其人だけは昔の豪傑主義であつて教育の何物たるを知らぬのである、さう云ふ人は天禀でエライ立身した人であるが、今日にては役に立たぬ、却つて害になる、此の教育は迂遠にして容易に効果が見ないやうであるが、其實さうでない、學齢兒童を學校にやつて御覽なさい、滿六歳で行つて三年經ては一通り物が書けたり讀めたりする、それは始終見て居れば不思議でないが、三年の間旅をして歸つて見ると貧人の子供であつたものが三年目には讀み書きが出來る、それから進んで行くと實際の學でも、普通教育でない專門的の學問になると速成なら三年で出來る、國と云ふ上から言つて三年と云ふものは至つて短い、國家の生命は何千年と云ふものであるから其中の三年は實に僅である、時の間に立派な人が出來る、日本も新しい教育制度を施いてから三十年此の方である、さうして今日ではそれ等の點に於ては餘り後れて居らぬ、外國人と比べて見ると富の度合が後れて居るほど後れて居らぬ、それであるから教育に依つて一般の人の考へが進んで凡そ商賣は斯う云ふものである、工業は斯う云ふものである、同じ工業をする

にしても昔の儘ではいかぬ、改良せねばならぬ、斯う云ふ方法にして行かねばならぬと云ふことが分つて進んで行きましたなら、決して今日一時軍費金が差支ることは憂ふるに足らぬのみならず、數年若くは十數年の後には是まで其實さうでなかつた所の此の日本が世界の强國民となり、即ち列强と肩を竝べるところでない、此の亞細亞に於て日本は覇と稱して居らるゝ國になるであらう、今日はそれになるかならぬかと云ふ大切な時である、千載一遇の時である戰爭と云ふことの不幸はあるけれども、他の一方から見れば實に千載一遇の幸なる時に生れたのであるから、ドウか諸君は其御心を持つて御奮發あらんことを希望するのであります。

（明治三十七年四月二十四日兒玉郡敎育會第二回總會に於て）

◉體育所感

井口あぐり先生演說

私は只今御紹介がございました井口あぐりと申す者で皆さんには初めて御目に懸ることであらうと思ひます、今日此會に出まするやうに御話がございましたが、丁度都合が出來ましたから出て參つたのでございます、出て參りました以上は何か皆さんの御爲になる面白い御話を申上げるのが當り前でありますが、私には到底さう云ふ風なことは出來ないのでございます、且今日はこゝにございますやうに體育に付て感じましたことを申上げたいのでありますが、是は私がこゝで初めて申上げるのでなくして昨年歸りましてから隨分方々に參つて御話をしたのでございますから、中にはドツかで御聽きになつた方もないとは言はれませぬ、現に昨年何月でございましたか、矢張り此の埼玉縣の川越に參つたことがございますが其時にも矢張身体に付ての御話をしたのでございますが今日も亦同樣の事でございます。私の是から申上げますことはモウ皆さんは十分御承知でありませうが、併し私が向ふの方に參りまして色々實際に見たり聞いたり致したことを皆さんの御耳に入れましたならば少しは御參考にならぬとも限りませぬから、私が住んで居りました亞米利加の方の人々が身体に付てドレだけ能く氣を付けるか、身体を丈夫にして行くにはどう云ふ手段を取るかと云ふことを申上げてそれから段々に日本の方と比べて見たいと思ふのでございます。

さて日本と云ふ國は三十年少し上の年に於て總ての事が段々進んで來たことは誰も皆認めて居ることでございます、敎育の方は素よりのこと、商業の方に於きましても、工業の方に於きましても、或は軍事上の方に於きましても非常な進み方を以て進んで來たのでございます、それでございますからして近頃の方々を見ますると色々の理窟が能く分り、大變怜悧になつて居ります、昔は神の力か魔の力でなければ出來ぬと思ふたことも此頃は色々の學問の力から明にすることが出來たり、不思議と思つたことも不思議でなく當り前のこと、思つて人が疑はなくなつたりすることは皆學問の力によつて進んで來た譯でございます、このやうに理窟も能く言ひ、議論も能くする、譯も能く分つて大變怜悧になつたといふのはつまり頭が大變に能く進んだのでありまして誠に喜ぶべきことであります、所が一方に於て頭が進んだ割合にドウも身体の方の進み方が宜くありませぬ、身体の丈夫さは一向つり合がよく進みませぬ、進まないのみか昔の人に比べると却つて弱くなつたのではあるまいかと思はるゝ樣な傾きがあります、折角學校に入つていろ〳〵の難儀をし入費をかけて長い年月の間に學び得たことも自分が世の中に出て實際使ふまでに至らずに病氣に罹つて中途で止めなくてはならぬ樣になつたり又は腦病とか肺病とかいろいろの病氣が多くなつてあたら才能を懷いて其まゝ夭死する者が澤山ある樣に思はれます、この樣な風が段々進んで參りましたならば詰り此の日本の大變な不利益になる事でございませうッ、それで近頃になりましては身体を丈夫にせねばならぬドウも頭ばかり能くなつても其頭を使ふのに身体が耐へられないやうでは折角金を使つて鍛へた頭も何にもならぬと云ふ所からして皆身体に氣を付けるようになつたかと思ひます、この樣な注意を向ける樣になつたのは何時頃から始つたかと云ふ事は私はよく存じませぬから今明に此の所で申すことは出來ませぬが併し私が考へて見まするに明治二十七八年に日本と支那と戰がありました、あの時あたりからそろ〳〵始まつたのではないかと思はれます、それと申すものは御承知の通り其當時日本の兵隊は大變强くつて非常な勝利を得ました、さうして戰爭の爲に死だ人は僅か千人足らず八百人少し以上でありました、そうですが病氣に罹つたり或は傳染病に罹つたりして死だ者はドレほどであるかと云ふと、丁度戰死したものゝ十倍以上即ち二萬人以上とか申す事に承はり

ましたいさう云ふ風なことがあの當時大變人の注意を引いたのではあるまいかと思はれます、尤も是の如き有樣は管に日本の軍人ばかりではありませんで何れの國でも通じてあるそうでありますが、併し外國人の戰爭で病死する者と比較しますると日本の方が餘程割合が多いそうでございます、若しも日本人が平生からモウ少し身体を丈夫に鍛へて居りましたならば同じ病氣になつて死ぬにしても其人數はモウ少し少い事であろう、ドウも平生から身体について注意の仕方が足らないで弱い人が多い爲にさう云ふ結果になつたのではあるまいかと云ふ考へが一方に出て參つたのでございませうと思ひます、それから今一ッはあの時分までは日本といふ國は世界の内に有るか無いかまだ外國の人などには餘り知られなかつたのでございますが、兎に角日本に比べますと土地は何倍か大きく又人口も多い支那の國と戰爭をして勝つたのでございますからそれよりして日本と云ふ國が世界の中にあつて然も大變開け兵隊も強いと云ふことを人に認められたのであります、サテこの樣に日本といふ國はなか〳〵ェライ國であると云ふやうに世界の中の人に認められる樣になつた以上は今までよりは總てのことに付て一層進まなければならないと云ふ事になつて參りました、即ち人民の責任が重くなつて仕事が殖えて參ることになると今までの身体ではそれだけのことに耐へられないからどうしても身体をモット丈夫にすることにつとめなければならぬと云ふことになつた樣に考へられます、其結果學校などでも体操の事に付てだん〳〵意を注ぐ樣になり殊に私は女子の教育に從事して居りましたのですが女生徒の身体の健康上についてもいろ〳〵注意しはじめる樣になつたので御座います。

私が女子体育に付て研究する樣にとの命を受けて米國に參りましたのは明治三十二年でございましたが其翌年から續きまして三十三四年でございましたか彼の北清事件がございました、其際各國の聯合軍隊と支那の軍隊と戰爭を致しました際にも矢張り日本の軍人の勇氣といふものは各國の軍人より遙に秀いで丶立派な働ぶりを致したのであります、丁度私が亞米利加に居つたのでありますから其軍人の方々のお蔭で私共までも向ふの人に大層尊敬された次第でありました、兎に角日本軍人の強いことは強いに違ひありませぬが併し各國の軍人と日本の軍人とを比べて見ますとドウも其体格の方はいかに最負目から見ても日本は一歩讓らねばならぬ事で其日本の軍のよく各國の軍に頭角をあらはしたのは管其氣象一つであつたのである、夫故もし長きにわたる樣なことになると惜しい事には其體力は到底持ち耐へる事が出來まいといふ樣な評は屢々耳にしたことがあります、つまり外國の人々との比較上その樣な感じが起つたのであるからそれが日本の人の身体をモット丈夫にせねばならぬと云ふ大いなる動機になつたのであろうと考へられます、それは單に軍人の方から取つた比較でありますが、其外に教育者の方々が學理の方面から研究をされて人の精神と身体との關係を明かにし確實不撓の氣象を養成するにはドウしてもそれを容れて居る處の身体が強健でなくてはいかぬ、有用なる人物を作るにはどうしても身体の健全を計らねばならぬといふ事が段々ヤカマシク言はれるやうになりまして、色々この樣なことが結び付いて近頃ではドウ考へ參りましても日本人は今のやうな体格ではいけぬ日本人は身体を丈夫にせねばならぬといふ事を云はれる人が澤山になつて來たのでありませう、私は地方などのことは能く存じませぬ又東京あたりでも一般の人はドコラ邊まで進んで居りますか私には分かりませぬが兎に角學校の方で教育に從事して居る教師の間などには体育と云ふことを大變ヤカマシク言はれまして アチラでも体操の研究會があるとか、コチラでも遊戯の講習會があるとか云ふことでドウカと云ふとまづなか〳〵盛んな有樣でありまして ズン〳〵進んで參る方の時期になつて居ると私は思ふのでございますから從來の有樣に比べましては誠に結構な事と喜んで居る次第で御座います、併し一方からいひますと右の樣な考が日本全國のドコもカシコにも推し及ぼしてあるかと云ふとまだ〳〵さうは行きますまい、日本全國どころの話では御座いませぬ、日本帝國文明の中心たる東京に於てさへも一般に其考へは行渡りませんで只僅か少數の人間の頭に止まつて居るだけである樣に思はれまして私の參りました亞米利加などの人々の体育に注意致しますのを比べて見ますとナカ〳〵其足モトにもより附くことが出來ないやうな有樣だらうと私は思ふのでございます。

今向ふの方の有樣はドウであるかと云ふことを簡短に御話申上げたいと思ひます、向ふの人には自分の身体についてはどう云ふ工合に注意しどう云ふ風にして其健康を進めねばならぬかといふ事は一般によく了解されて居るのみならず其自分の身体に注意し其を丈夫に

するのは果して只自分一身の爲のみでなくそれがひいて亞米利加國全体に如何なる關係を有して居るかといふ事はドンナ人々にも分つて居るであらうと思はれるほどよく体育につきての注意が行き屆いて居る樣に思はれました、元來私は向ふに參ります前に亞米利加は非常に体育が盛んである、人々が大層運動を熱心にすると云ふこと且は女子も男子と同じやうに活潑に運動をして誠に强いと云ふことも聞いて居りましたが、向ふに行つて見ますると私が考へて居りましたよりはまだ幾層倍か盛んなのでありました、先づ小さな子供などの有樣を見ますると其親達は大變能く氣を付けますのであります、最早學校にやらねばならぬ樣な年齢になりましても其子供の健康が學校の課業に耐へらるゝかドウかと云ふ疑ひがあると學校にやることを見合せて或は体操の學校にやるとか又は醫者の指揮をうけて藥を飲ませぬまでも何か丈夫にする方法例へば運動の事、食物などの事によく注意して愈々學校にやつても其仕事に耐へられると云ふ曉になつて初めて學校にやります即ち少し位學科に後れても何んでもない身体が丈夫にさへなれば一二年のおくれはわけなく取返させることが出來るといふ考を持つて居る樣に思はれます、それから子供が小學校などに這入つて体操とか遊戯とかをすると云ふ時は大抵な親……親と申しても男親ではありませぬ、母親でありますが、其母親が學校に參つて學校ではどう云ふ運動を子供にさせて呉れるか、どう云ふ体操をさせて呉れるかと云ふことを見ます。それは只見るばかりでありませぬ、分らぬ所は其やり方などを教師に問ひ正しまして自分で其やり方をよく覺えて來て學校に体操とか遊戯とかない時分は家で其事をやらせることになつて居ります、又体操とか運動とかに入用な品物は自分達が假令どのやうな都合をしても整へてやります、例へば向ふでは体操の時は必ず着物を着換へ靴を穿き換へさせる事になつて居るのですが夫等は父兄より何んの故障もなく學校の命のまゝによく整へますし其他運動に入用な器械などでもドンな苦しい目をしても取揃へて其用に缺けないやうにしてやります、夫ですから學校の先生方は誠に骨折りは少く自分達は教へるだけ教へればコチラでヤカマシク言はないでも家の方でよくやつて呉れます即ち學校と家庭とよく連絡し互に補助しあつて居るのであります、この樣な有樣は男でも女でも小學校から大學校まで續いて居るのであります又いづれの學校でも体操場と云ふ名のついて居る以上は其建物は日本に居つては迚も想像が出來ない樣に立派に出來て居りまして其体操場だけでも日本の小さな小學校位はある樣に思はれます即ち体操場と申しますと日本では只家根があつて床が張つてある位の誠に粗末な建物といふよりは外、考には浮び出ぬのでありますが、向ふの体操場は前申した通り誠に立派で色々の器械なども丸でカラクリのやうな仕掛で備付けてあります、さうして小學校より大學校まで通じて男でも女でも一樣に同じことを教へます即ち女でも男と同じやうな体操をして跳んだり又は高い所に登つたり其他種々の器械体操なども致します最も女の身体に適當しない樣な器械体操に於ては幾らか掛酌して男と區別致しますが其ちがひはごくわづかであつて日本のやうに男女の運動に於て其間に非常な違ひのあるやうなことは決してございませぬ、日本の子供でも丁度七八歳位までは男も女も大して遊び方に違ひはありませぬが丁度あの樣な有樣が向ふでは男女の大學までついて居ると考へて宜しいのであります是が學校生活時代の有樣でございます。

それから今度學校を卒業致しました後、男女ともそれぞれ職務に從事して役人になり、商人になり、教員になるその時代になつても學校時代の生活をつゞけるのであります、學校でやるばかりであとはそれきりお止めにすると云ふことは決してありませぬ、夫についての設備はどうであるかといひますと大抵な所には特別に体操だけを教へる學校が方々にございます、或は特別に体操の教師を養成する處もありますし又普通の人即ち男の方ではお役人でも小僧でも丁稚でも行つて習ふことの出來る体操の學校が諸處にございます、それですから只學校に居つた時だけ体操なり遊戯なり運動なりをするばかりでなく、其人々は或る時間を設けて一日の中で三十分とか一時間とか、或は毎日行くことの出來ない人は二日に一度とか、一週間に二度とか云ふくらゐに時を極めて其學校に行つて自分の身体を鍛練する事を怠りませぬ、又職務の都合で晝の内行かれませぬ樣な人には夜教へるといふ便利を與へて居る夜學校がございます、そふ云ふ學校に行つて見ますと白髮の生へた老人も居り、そうかと云ふと二十歳前後の血氣盛りの若い人も居り、或は商人も居れば役人も居ると云ふ樣ないろ〳〵の種類の人間の集合でありますが皆一樣に教師の號令の下に教授を受けて居るのでありますし又婦人の方でありましても同樣で年をとら

れたお婆さん又は奥さんとなつて居られる人又はお嬢さん方でも皆一處にして教べる所がございますし其他商賣屋の店の賣子とか、又は紡績會社の樣な處に出て居る工女といふ樣な女では晝の中行けませぬから一日の仕事を終へ夜の食事をすましてから一二時間ある体操學校に行つて自分の身体を鍛へるいろ〳〵の種類の運動を教師から教へて貰ふのであります、一日働いて体を動かして居つても自分勝手にして居る手足の動かし方は十分に體を活たへる事は出來ぬ、何んでも規律正しくする運動即ち体操をせねばならぬと云ふ考で、晝の中の働きで疲れたらうと思はるゝ人でも御飯を食べてチョット三十分も休むと疲れた顏色もせず直ぐ出て行くのでありますがナカ〳〵根氣が續くものと私は感心致したのであります、それから体操の外の運動では學校に於ては男子の方ではフートボール又はベースボールの類女子の方にも亦ロンテニス、バスケットボールなどいふものが盛んに行はれて居りますが是も矢張學校以外の人々の間にも盛んでありまして体操をする爲に体操學校があると同じく又自由に運動をする爲に其設備が出來て居ります例へば一つの町なら十つの町、二つの村なら十つの村に共同の運動場が出來て居ります、其所には器械体操の方の爲に器械も備へてありますれば、テニス又はベースボールなどの出來る樣な場所もある、又冬になれば氷すべりなどの出來る樣な工合にもなつて居ります、特に子供の爲めには其道の心得のある教員を幾人か雇つておきまして其監督にあて器械をイヂツても危くないやうにしてあります、或は公園の中にも右の如き設けのある處もあります、又一つの町一つの村には大抵運動の倶樂部があつて相當の金を拂つて其部員になれば勝手に其場所で運動をする事が出來ると云ふ便利もございます、この樣に自分さへやる氣でございますればドコへ行つてもどうなりまして体操なり運動なり出來るやうな仕組が付いて居ります、それでございますから春夏秋冬四時の分ちなく前の如き設けの場處に行つて見ますれば老若男女皆打ちまじりて面白さうに遊んで居ります、時に依つては一家中即ちお爺さんお婆さんを始めとし孫までも揃つて遊んで居ることもございます、この樣な有樣を日本から行つて初めて見ますると殆ど氣違ひ沙汰のやうに思ふたのでございますが、併し段々見ます中にさう云ふやうに年寄も子供も男も女も交つて樂しく運動する事の如何に樂しいものであるか、又此樂しき間に知らず〳〵身体の上に及ぼす利益の莫大なものであるなど云ふことは自分が明かに見出し得たのでございます。

右申上ました樣に曾に學校の中のみでなく又學校生活の時代のみでなく世間一般に運動に熱心になつて居る故か向ふの人々の体格は一体に立派で骨骼もたくましく肉も亦シツカリとして居りまして誠に丈夫に見ゆるのであります。

只今私の申しましたのは運動ばかりでございましたが身体を強健にするには運動だけでは十分でございませぬ、或は着物の上食物の上住居の上に付ての注意なども皆必要なのでございませう、是等の點をも少し申上げたいと思ひます、それで今着物のことに付て申しますと日本の着物又は西洋の着物に付てのよしあしは一概には定められませぬ即ち何れにしても一利一害があるので日本の着物に善い所もあれば又西洋の着物に善い所もありますからドツチがよいドツチがわるいとは言はれませぬ併し他の點は兎に角日本の着物の運動の上に於て批難すべき點の多いと云ふ事は体育に人々の考が向くに從つて益々認められる樣になつて可成運動の方が便宜に出來るやうな着物を選ぶと云ふ考へは昨今大變進んで來たこと、私は思ひます即ち近頃學校の女生徒一般に袴を用ゐさせる事になつたり又筒袖を奬勵すると云ふことは皆其結果であろうと思ひまして私は誠によろこんで居る次第であります、此服裝などの改良といふ事は獨り日本のみならず米國あたりでも近頃衛生上に害あることは之を取り除けてます〳〵益ある方に進んで行く方針を取つて居ります、女の洋服といふとすぐ皆樣のお考の中に彼コルセット即ち腰部を緊くしめる道具を用ふるといふ事が浮び出さるゝ事と思ひますが其コルセットが如何に身体に有害なものであるかといふ事は近頃大變やかましく唱へられまして昨今若い女などは一向さう云ふものを用ゐることを喜びませぬ傾きになりました樣でありますが從來の日本の婦人の用ゐて居りました巾の廣い帶などをごく緊くしめますのも其害の點に至りましては矢張洋服のコルセットと甲乙はあるまいと思はれますが是も段々用ゐられない樣になつて其代りに細帶に袴となつて來ますのは誠に結構でありますが併し是も曾ほんの一部分の人々即ち女學生のみに止まりて一般の婦人に及ぼされないのは實に殘念の事に思ひます、衣服の事に付て他に日本人の欠點とも申すべきは日本婦人の多數は

身分不相應に贅澤な着物を着たがることで御座いますが、向ふの人は一般にとは申されませぬが多數の人々は身分相應な服裝に滿足してなるべく清潔な着物を着ると云ふことに注意して居る樣に思はれました、其樣な考の人が多いのでありますから子供などには誠に簡單で粗末な着物を着せておきますが其代り毎週日をきめてよく洗濯し清潔なサッパリとした着物を着せ其着物は洗つて切れるまで着せるのであります夫れが習慣になつて居る故か子供も親から着せてもらつたものに安んじて決して人を羨む抔と云ふことはありませぬ、それで暑くなく寒くなく禮にはづれず殊に身体の害にならずして活潑に運動の出來る樣なものを選んで子供に着せますものですから子供等は遊びますにも着物をよごすとか破るとかの心配はなく自由に思ふ通りに身体を動かし得るのであります、日本でも只見ねの方のみを飾るといふ事に重きを置かず殊に子供の中の体の發達の盛んな時期を運動の不自由な着物などで妨げをさせずに十分に發育させる樣に目をつけて其目的に適する樣な衣服を選ばれる樣にしたいものだと始終望んで居る次第であります、夫れには前申上ました通り學校の子供などには筒袖に袴などは先づ目下の服裝としては適當のものだろうと考へられますから父兄の方々は喜んで此服裝を其子弟の方々に御奬勵になり、出來ますならば只子供のみでなく一般の婦人にも袴の用ゐらるゝ樣になる事を私は切に望んで居るのであります。

それから食物の事を申上げますが、是は人々の生活の度にちがひがあり又國々の習慣がありますからナカナカ極りを付けると云ふことはムヅカシイのでございますが、私は考へますのに日本人の食物は外國の方と比べて見まするとドウしても粗末な樣に思はれます、と申すのは日本人は体の滋養になる物を十分いたゞかないと云ふ意味であります、或は中には妄りに分量を多くいたゞく人もありませうが澱山いたゞいたからと云ふても其物が体の營養にならぬもの又は不消化物などであつてはたゞ胃腸をいためる計りで何んの益もないことであります、分量が少く共十分體の養になる樣なものを選んで取るのが最も必要な事であります、然るに日本の方々の有樣を見まするとと男子の方々は隨分かまはずに大食して中には消化器をいためられる方もありますし、女子の方にも或はそういふ方がないでもありますまいが中には大變にまちがつた考をもつて居られる婦人があつて何んでも少くいたゞいて居るのは

女の美德でもあるかのやうに思つてほしいのに我慢をして苦しい思ひをして只人前を飾られる事があるそうです、若しそんな事がつゞきましたなら其結果身体がヒヨロ〳〵に痩せて誠にヨワ〳〵しい人間になるのは到底免れられない事と考へられます、今一ッ女の方についての悪い習慣がございます、それは前に一寸申上た通り婦人は贅澤な着物を着て見ねを飾りたがることで御座いますがコヽラ邊の方々の樣子は私は存じませぬが東京あたりで一般の女を見ますと前申上た樣に衣服の慾が御座いまして自分の自分に應じて滿足して居るといふことはわけで若い女には出來ない樣にみねます、それとも金の有る人が其分に應じて致しますなら何にも構ひませんが有福でない人までが自分の家で出來ても出來ないでも一向頓着なしに他を羨ましがり親を責めて無理に着ると云ふ樣な事が東京あたりには澤山あるそうであります、さうして時々の流行を追ふて着物を幾つも拵へ着もせずにシマッて置いて喜んで居るといふ樣な風が隨分ある樣に伺つて居ります、其影響の及ぼす處は如何であろうと思ひますと、つまり一家の生活の上に於て何れの點かに於て之を償はなければならぬ事になつて參ります即ち食物に及ぼされる影響が最も甚しい事だろうと思ひます即ち食費の方を減じて衣服の料に當てるといふ事になるのが目下の有樣であるまいかと思はれます、私は向ふに三年居りまして米國人の或家族の中に入りて生活したのでありますが日本に歸つて來て如何にも其粗食なのに感じ同時に着物の贅澤なのに驚いたのでありました、三十年以前の日本の人間はイザ知らず此明治の時代の人間に至ては體の働き方も頭の使ひ方も歐米諸國の人間とは少しも變りませぬ、彼と同樣に頭も身体も使つて居るのに能く此種の食物で續いて行くものであると思ひましたが併しよく考へると其粗食の結果は目の前に現然とあらはれて居ないにしても何處かに及ぼして居る處があるにちがひないと思はれるのであります、一体食物は申上ぐるまでもなく身体の本を造るものであります、其資本を十分に入れず又入れた處にして良い質のものを入れずして身体を無暗に使ふと云ふことは理屈上出來るものではありませぬ、彼瀛車瀛船などが非常な働きをして居るのは詰り石炭といふ燃料を絶ねずつぎ込み居る故で若し其石炭の供給を十分によくしなかつたならば瀛車瀛船は十分の働らきが出來ず又石炭を用ゐるにしても其質の良否によつて其働らきの上に大變な

差が出來て參るものであります、食物の人の身体に及ぼす影響も少しも石炭と異なる事がなく其食物の供給の十分なのと不十分なのと其食物の善惡即ち滋養になるものを取ると取らぬとのちがひは心と体の働らきの上に大變な差を生ずることは明かな事であります、この様に食物といふものは大切なものでありますから人の身体を丈夫にしてよく働らかうとするのにはどうしても滋養のあるものを十分取る様にしなければいけませぬ、よく普通の人が考へます事に只お腹が張つて居ればそれで十分であるといひますが夫は間違かと思ひますお腹を張らすには只御飯を澤山いたゞけばよろしいのでありますが只夫丈けでは体を保つて行くに十分の養ひは得られないのであります、どうしても魚肉とか獸肉とかを用ゐる様にしなければなりませぬ、魚肉や獸肉を用ゐないで只植物性の食物のみで十分の養ひを取ろうとすると澤山の分量を取らなければならず、其爲め胃腸を大變に働らかして夫を疲らせ遂には胃病にかゝり夫れよりして身体の健康上に大變な害を與へる事にならぬとも限りませぬ、併し是までの習慣があり又生活の度もありますから誰も〳〵肉とか魚とかといふ樣な贅澤な物計りをいたゞいて居るといふ譯には參りますまいけれども其處は前申上た處の婦人の着物の虚飾の方を見合はして其一部を食物の方の入費にあてたならば如何なものかと思はれます、いくら綺羅を飾つても其れに包まれて居る体が痩せてよわ〳〵しい事では何んの甲斐もありませぬから私は一般に日本の方々に服費を減じて食費を増す事にせらるゝ樣に切望するのであります。

それからモウ一つは住居のことでありますが日本の住居は目下の有樣では日本人の身体の發育上に大なる妨害を與へて居る點があります即ち日本の家の構造は皆坐る樣に出來て居りますが、此の坐ると云ふことが大變に下肢の發達に邪魔になるものであります、それは始終坐つて居りますと身体の養分たる血液の足部に循環するのを妨げるのであります即ち上体の重量で足部を壓しますから從て其部分の血管が壓迫されて血液の通つて行く道が塞がりますから食物がズン〳〵そこへ參りませぬからしてどうしても脚部の發達がよくありませぬ、是は證據にはならぬかも知れませぬが、日本人と外國人とを比べますと腰から上の部分其胴の長さは外國人とあまり變りませぬが腰から下の部分が違ふので夫れで非常に身長が短かいのであります、ヲカシナことには私の初めて外國に參りました時に自分で自分は見られませぬが他の日本の方々と外國人と駢んであるいて居らるゝ處を見ると誠に日本人は小さく不恰好で高帽などを被られると實に其腰の上と下の部との酌合ひがヲカシイのであります、是の樣に脚部の發達の不十分なのは或は遺傳にもよりませうが其坐するといふ事が大なる原因をなして居るに違ひないと云ふことは人もいひ私も考ふる處であります、それでは坐ることを止めて西洋のやうに腰を掛けるが宜しいかと申しますと無論それはよろしいのでありませうけれども今の日本の有樣では迚も急にさうは行きませぬ、只學校とか又は或一部分の方々は既に其方法を取らるゝことでありますがまだ一般にさう云ふ風な設けが出來て居りませぬから其間は他に方法を設けて之を補ふより外ありますまい、即ち其方法としてはなるべく脚部の運動をよくする事であります。

右述べました樣に歐米と日本とを比べますと其着物に付ても食物に付ても住居に付ても將た運動に付ても殘念ながら向ふに讓る點が多いのでありますから若しも日本人が是から身體をよく發達して强健にして行くことを考へるならば着物食物住居或は運動などにつきて改良進歩を計らねばならぬ事と思ひます、まだ其外に衛生上の點から彼我を比較致しますとなか〳〵彼國から取るべき處が多くあります、其一ツ二ツを申しますと飲水の供給とか下水の排泄とか申すので御座います近頃日本でも東京などは水道の設けがよく出來て大抵な所では皆其供給を仰ぐ樣になりましたのは誠に結構な事で是は段々日本全國にも及ぼされるだろうと思ひますが一方の下水の排泄の方は實に不完全極つたものだろうと思ひます、亞米利加などでも極々の田舍に行くと日本のやうな有樣でありますが先づ普通の町などでは家の中の穢ない排泄物は其時々に流して仕舞つて決して家の中にためておきませぬ、さう云ふ所からして日本で最も恐るべき流行病として居る虎列刺病とか赤痢病とか云ふ病氣は殆ど無いと言つても宜いのでございます、私が三年居りました中に虎列刺などゝ云ふことを聞いたことがございませぬ、つまり是は飲水の設けが良し下水の排泄がよいので人民一般が其お蔭を被つて居る故であろうと思ひます、それですから日本などでも人民各自が身體の健全を保ち夫を進めると云ふために前申上た通り種々の點に注意せねばならぬのは勿論でありますが又一方で一般に關する衛生の思想

が進んで一村なら一村、一町なら一町の人達がよく其全村、一町の人々の健康を保つ様に協力することも體育を進める上について必要なる事と思ひます。

前申述べた様に米國では一方で色々の方面から身體の不健康になる様な原因を去り一方ではます〳〵健康を進める様に注意する處から及んで來る影響はドウかと申しますと先づ一人一人についての元氣が盛んになります即ち病人のやうに青い顏をしてヨロ〳〵して不愉快に日を送ると云ふやうな人は多くなく皆活々として物事をサツ〳〵と取運ぶといふ樣な氣象があがつて參ります、それでありますからして學生は學生で遊ぶ時にはよく遊び勉强する時には一意に其勉强に意を注ぎます又人の細君となつた人は家政をよく整へ子供を敎育するにも誠に熱心に致します、又敎員であれば世の中のことに後れないやうによく研究するのでありまず、男子の方も其通りでつまり一人〳〵の元氣が寄り集つて亞米利加全國の元氣を成して居るのでありますから其國の事業のあがること實に盛んなものでありまして日本などに居つてはナカ〳〵想像の付かぬほどズンズンと國が進んで行くのであります、敎育の上でも工業の上でも皆强い元氣のある人々が働いてやり通して行きますから文明も進み富の度も增してくる實に其盛んな事は夥しいものであります、私は僅か三年の間さう云ふ人々の中、社會の中に這入つて居つてそれから日本に歸つて來て見ますと實に其ちがひはあまり甚しい樣に見ゐて誠にナサケなく思ひましたのでありまず、或は中には澤山の取り除けがあるのでありますが只一般に概して目にうつつた有樣を申しますと日本人は何んとなく元氣が足らなく物事がきまりよく取り運ばれぬ樣に思はれます、其原因はいろ〳〵ありませうが其一として數ふべきは身體の健康の十分でないと云ふ事であろうと思ひます、それで其健康を進めますのには前から段々申上た方法を取らなければならぬのでありますが先づ學校では其體育の一科として課して居る體操遊戯などを敎師は熱心に敎授して其結果をあげる樣につとめ、又家庭に於ても其敎師を助けて其子弟を奬勵する樣にするのが目下日本の體育をすゝめる最初の手段かと思ひます、それから上に進んで學校を出た以上は男でも女でも自分の身體の上に付てよく注意し目下の日本の狀態に於て出來る範圍に於て運動をもし其他の方法によりて身體の强健の度をまさねばならぬ事と思ひます、よく私が耳に致します事には、如何に運動したくも、身體によき訓練を與へたくも、日本には夫だけの設備がないから止むを得ず怠ることになると云ふ事であります、是はなる程尤もの事で日本では學校外では體操をしたくとも體操場はなし散歩に行きたいと思ふても相當の場所がなく若し又近處に公園などがあつて何時でも行けば行き得る樣になつて居つても婦人などが一人ブラ〳〵散歩でもすると從來の習慣上人がとや角やかましく批評する有樣であるから勢ひそう云ふ事は見合せるといふ事になつてしまふのであります、それでも男子の方は何かいろ〳〵の都合で外に出る機會があつて終日家の內にのみ引籠り居るといふ事は澤山ありませぬが女子に至りましては朝から晩まで家の內に引き込んだまゝ終日日光を見ずに過してしまふといふのが多くありがちの樣に思ひます、尤も職業によつては誰も〳〵皆そうであるとはいはれますまいけれども目下の日本の狀態では奧樣などゝいはれて居る人はまづ右の有樣であります、かゝる有樣では如何に身体の健康を願ふともとても得られる氣づかひはありませぬ、又一方では運動などしたいと思ふても忙しくてなか〳〵氣樂な時間を見出されないといふ人もある是も日本人の今日の狀態では或はそうかも知れませぬ即ち日本人の生活には一向きまりがなく遊ぶでもなければつとめるといふでもなく始終グズ〳〵にズルズルと無益に時間を使つて朝から晩まで誠に忙しさうにして居ります、若しよくきまりをつけ物事をつとめる時には一生懸命に意をそゝぐ樣にしたならばグズ〳〵に費した半分位の時間で同樣の事を成し得る樣になる事は當然の事でそして其あまりの時間で結構に運動などをもする事が出來ると思ひます、運動などに費す時間は決して無益の時間ではありませぬ、夫れが却て後に物事に從ふ時の勇氣を養ふのであります、夫故日本人も運動する暇がないの設備がないのといふ樣な事のみをやかましくいはないで每日の生活に規律をつけて運動の時間を設け或は最初少し位他人から批評を受けても夫に耐ゐて或は野原へでも行くとか山登りでもするといふ方に氣をむけ暇を見付けては家に寢ころびてつまらなく日を送る樣な事がなくなる樣に心がけねばならぬ事と思ふのであります殊に婦人の方々に申したいのは女といふものは前申上ました通り兎角家に引き籠りがちになるもので其仕事と申しては只三度の食事の支度をするとか、裁縫をするとか、或は拭掃除をするくらゐの事で或少數を除いては人と交際する

事もなければ世間の事が誠にせまく少しも氣を慰め心をサツパリとさせる機會はありませぬ、それ故ツマラぬことを考へたりフサイだり或は嫉み心を起したりする樣になり遂には神經を痛めて神經衰弱になるとか或は病氣になるとかするのであります、若しもこゝに前申上た樣に何か設備が出來て居て女でも勝手に外に出て散歩も出來、運動などでも憚る處なく行ふ事を得る樣な事がありましたならば女にとつてどれほどの幸福でありませうか、どうか、その樣な有樣の一日も早く我國に見らるゝ樣に希望するのであります、然るに現在の日本の有樣では迚てもさうは參りませぬ、折角教師が學校で子供に身体は眞直にせねばならぬ胸を張り頭をまつすぐにして居ねばならぬ抔やかましく申しましても家庭では皆それを毀して仕舞ふ殊に女兒についてはその樣の事は女らしくないとか云ふ攻擊の下に打毀して仕舞ふ有樣でありますから誠に殘念な事に思はれますがゝる事即ち教育の事などはどうしても學校と家庭と一致しなければ其功績があがるものではありませぬから私が歸つて參りましてからよく諸方に參つては此体育の事について、只學校の先生にのみ任せないで其父兄の方々も共に盡力せられる樣に御話申上ぐるのでありますが、どうも言ふ事は易く行ふことはかたく且つ目下の日本の狀態ではどうしても其實行はむづかしいのであります、處が幸であるか不幸であるか別りませぬが私共に取つて寧ろ幸とも思ふのは目下の戰爭でございます、此の戰爭は日本の國に取つては決して喜ぶべきことではありませぬ、直接軍事に當つて出征して居らるゝ方は自分の命を拋つてはたらいて居られますし又殘つて居らるゝ方は上　天皇陛下を初めとして皆一致協心力を盡して我が國のために骨を折つて居らるゝ事でありますから國の爲めには決して喜ぶべきではありませぬが併し此戰爭のお蔭で從來柔弱怠慢に向ひつゝあつた風が段々薄らいで人々の心が非常に引締る事になり又は勤儉の心が厚くなり或は忠君愛國の氣風を興奮させるといふ樣な機會を與へられたのでありますがモウ一ツ私の直接に喜ぶべきことは日本人民の体格を進むる事の必要なる事は深く人々に認めらるゝ事であります、即ちかゝる時は誰も〳〵体の强健な兵士や國民を思ふのであります、こう云ふ時期によき方法を以て人々におすゝめ申したなら平生よりかは一層注意せらるゝ事が多いことであろうと思ひます、私は此の度の戰は何年かゝるか別りませんし又最後の勝敗の事もわかりませんのでありますが併し是迄の樣子では必らず日本の勝利に歸する事と存じます、イザそうなつた曉は此日本帝國はいよ〳〵世界の中の一等國になりますから其仕事も從來に比べては何層倍かいそがしく多くなる事でありませう、そうすれば其人民も從て是までより何層倍か頭を働かせ体を働かさねばならぬのでありませうと思ひますから夫に當るには人民の精神も身体も從來より幾層倍か强く丈夫にならなければならぬわけであります、或は人が申します事には体などは何んでもない立派な精神さへ持つて居れば容易く事に當らるゝものである、現に此度の戰爭で明かである即ち露西亞の兵隊は非常に身体が大きいが日本人に負けるではないかといはれる殊に佛蘭西の將校などは日本の體の小さいのを戰爭に勝つ一ツの要具として數へてあるのでありますが併し是はドウでありませうか、私はどうも受取りかねるのであります、尤も体が小さくて敏捷なのは大きくて遲緩なのにくらべては勝を制するのでありますが併し若し大きい体格のものがよく鍛練して規律よく動ける樣な事になつたならば結局体格よく体力の多い方が勝を得るにちがひない、此度の戰爭でロシヤ人が若し彼の如き体格を以てもツと精神上の教育を受け軍隊の訓練をよくしたならばアンナ負け方はせないのでありませうと考へられます、一体日本人は私の申上ぐるまでもなく先祖傳來の立派な精神即ち大和魂を持つて居りまして、かゝる氣象は世界萬國何れを探しても見出す事の出來ない實に立派な寶物であります、其寶物があるからこそ他に於て外國に讓つて居る點をも補つて立派に成功して行くのであります、其劣つて居る點と申しますのは外でもありませぬ体格と思ひます、若し此体格をして他國に讓らぬ樣の度まで進歩させましたならば其世界一の精神と立派な身体と結び付きまして世界一の人間の團体となし此日本の國威を益々揚ぐる事になりませうと思ひます。

（明治三十七年四月二十四日兒玉郡教育會第二回總會に於て）

◉教育の基礎

子爵　加納久宣君

世には何々會が演說會などを開くと、必要なる事に就て述ぶるではなく、御集合の御方に對して、一人は先づ學者的に、一人は又農業的に、又一人は軍人的に演

說するが、何れも實行の目的がなく、只單に餘興的である、故に演者は只管聽者の喝采を得んことを希ひ、聞く方も亦然るべく實行する樣に考へずして、只演者の上手下手を批評して一日を終はるのみである、であるから今日の有樣は演說の食傷である、然るに、演說師にあらざる私を本日特に御招ぎ下されたるは、餘興的でない、只入新井村の一小國民として御話をするのであるから、後には御同意を得て實行して戴きたいのである。

偖て今日私が申上げ樣と思ふことは、敎育の基礎と云ふ標題を揭げて、其れに就て實際の御話を申し上げ樣と思ふ、諸君も御承知の如く、現今小學校は御郡に於ても二十八校ある樣に、全國一般に普及して居る、又之が任に當る敎員を養成する師範學校も各府縣悉く設置されてある、就學兒童の數に於ても、近年までは百中六七十のみであつたが、俄に長足の進步をして只今にては全國百中平均九十位にて、御郡は百中九十六の盛況を見るに至つたと云ふことである、而して管理するに上には文部省あり、其れより府縣郡市町村に至るまで、上より下まで揃つて皆活動して居る、故に如何なる寒村僻地と雖も家に不學の徒なきに至つたので、學制發布の精神は今日に於て殆んど目的の彼岸に達したのである、さり乍ら此の出來ばえは、未だ淺薄にして敎育の基礎となるべきものは、實に奧の院であらねばならぬ、然らば敎育の基礎とは如何なることであるかと云ふに、是れ本問題の骨髓である、其れは則ち町村である、町村の民力が大ならば其基礎は從て强固となり、若し町村にして貧弱ならば敎育の基礎が薄弱となる、故に敎育の基礎は、町村の貧富に基因す、例へば草木の枝葉が繁茂するは、枝葉が先きにあらずして根先づ强固に而して後に枝葉が相當に繁茂するのである、何れにしても根本が强堅ならざれば發達しない、敎育も亦此の如くで町村の實力が根にして敎育の進步が枝葉である、併しながら實力の發達する力と敎育費の發達と相均衡して行くや否やは、今日の一疑問である、全國一般の町村の有樣を聞くと、敎育費は其の三分の一を占むるのみか漸次擴張せられて、相半ばすと云ふ有樣である、そこで先きに設けられたる學校も、生徒數の多きを加ふるに及び計畫せられた校舍は狹隘を感じて其增築を要するものもある、又追々破壞せるものも年一年を重ぬるに從て用に堪ねざるに至るものもある、其上敎育費の大部は敎員費であつて、つまり敎員の待遇に要するところのものである、殊に本郡の如きは待遇がよき樣であるから誠に結構である、猶將來も永く持續されんことを望むのである。

さて今日の敎育費を學問の出來上つた上に徵するに、其結果に付て餘り感心せぬところがあると思ふ、それは敎員更迭の甚しきによることが多い而して其敎員更迭の繁きは大に其待遇如何に與かるのである、故に一人の敎員を長く一學校に留め置かんには、よき待遇して、其學校に一意專心力を盡さねばならぬと云ふことを思はしめねばならぬ、そうするには勢ひ敎員費を增さねばならぬ、而して又町村には國稅もあり、府縣郡市町村稅もありて、何れも帝國の進運と共に其稅率は恐らく年一年と上ることにきまつて居る、若し町村に於て、例へば年一萬圓を費せしに、儉約して其翌年は八千圓にすると云ふならば、其の費用に於ては其負擔が輕くなり、經濟の上に於ては非常に賀すべきである、乍併事業の上に於て世界の生存上又國家の伸張上帝國の爲めに賀すべきであるかは疑問である、であるから今年は節儉して去年より費用が少額になつたと云ふことは毫も喜ばれぬことである、然るに此の府縣郡市町村稅と敎育費との增加が年一年と增すに從て其人民の生產力が發達するか如何と云ふに、恐らくは相伴ふまい、即ち負擔の多くなつた割合に人民の生產力が增加してこまいではないか、御郡の如きは養蠶業盛大にして他府縣に比し富力あれば、私の話は適當でないかもしれぬ、併し凡ての點に於て費用が增してくるが、人民は工面がよいかといふに、各自の生產力が國の發達に伴ふて出資する丈は發達して居らぬであろう、敎育が發達しても生產力が發達せねば、枝葉の繁茂が其の根が張るよりも不釣合に發達する樣なもので恰も遠州流の生花の如くに、一朝中心を取りそこなふと忽ち轉覆する恐れがあると思ふ、故に敎育の發達は如何なる點にあるかといふに、最も注目すべきは學校經濟である、學校基本財產である、御郡に於ても已に貯金の方法ありと云ふも其れは未だ少額に過ぎない、基本財產も亦未だ滿足する數に上らぬといふことである、されば此の點に於ては吾々は不充分であると云ふことを斷言する、假りに一小學校の費用を一年三千圓なりとすれば少なくとも一學校に五分利附にして六萬圓の貯金がなければならぬ、然るに五分の利も尙ほ今後五年も續くかどーか、世の發達と共に利の下るは當然であるのである、利の高きは世のために喜ぶべきでない、何

となれば利子の高い以上は公債證書などを懷にして利を見て働かぬであらう、是れ國家のために望むべきでない、即ち此の利息はだんだん下つてくるに違ひない、故に六萬圓の基本財産を貯へて五分の利息が動かないとするも將來氣丈夫なりとすることは出來ぬ、此くの如くにして三十の學校ならば百八十萬圓である、此れ丈けなければ御郡に於ては學校の獨立は保てぬ、兎に角町村の生命は帝國の隆盛と共に長へなれば、生れてより二三年にして基本財産を貯へることは出來ぬ、百年を期して心掛けねばならぬ、而して一學校六萬圓の基本財産を貯へんとするの企圖成り立たなければ、教育の基礎は定まらぬ、立派な學校も若し今日にして此金がなかつたならば恰も深田の上に煉瓦造りを建てると同樣で、學校の危險なるは云ふまでもなく、空中に樓閣を作つた虐氣樓的では甚だ前途寒心に堪へぬと思ふ、これ私の理想を申すのみならず私の居村の丈新井村の如きも、一文の費用なくとも他の盛なる町村と競走して帝國と共に保つて行かねばならぬを以て少くとも之を維持する丈けの財産がなければならぬ故假令五十年百年かゝるとも其町村が獨立する基本財産をつくる爲の決議をなし其決議を實行したのである、其決議した事は如何なることであるかと云ふことを申述べたいと思ひます。

吾が入新井村には小學校が二ッあるを以て、それを立派に維持するだけの基本財産がなければならぬ、然るに僅かに四百戸位の小村にて、五十年百年を期して單に積み立てんとするも、誠に興味がないから何時か止める樣になるに相違ない、故に何か興味ある手段をせねばならぬと云ふて、其村方の勸農者を奬勵し品評會なるものを立て、之を手段として凡ての農産物及び水産品等勸業上の品物を陳列し、其品物を賣り其代金を基本財産にすること丶した、之れ優者を進め劣者を勵ますと云ふこと丶なる、斯くして一二回を開いた、所が、此の品評會の物品は、米なり麥なり又は商工品なり、量ならば一升以上、價ならば十錢以上として、村民は何たるを問はず出品した、出品せざるものは、價も高くなく品物も相當であるとて皆之を買ひに來る、故に朝に開きて夕には六百點程の品が賣り切れた、其賣揚げ代金が思ひの外あつて、一年目百五六拾圓、二年目二百圓、三年目が即ち十一月二十三日(新嘗祭)で終に元利合計五百九拾六圓餘と云ふのであるから五分の利で六百參拾圓平均一年貳百圓餘の利益を見て夫れが基本財産となつた、それ故五十年續けば六七萬圓の基本金は出來ると思ふのである、斯くの如くすると村民も些少の興味を感じて自ら種々の役に當り、別に日當を取るでなく腰辨當にて、審査員もやれば、會計もやると云ふ有樣で、其雜費筆墨等は悉く有志者の寄附金を以て充つるといふ工合で、その外には何もない、其故に雜費は少なくして基本財産に得る所は多い、斯くして漸々、村民も狡者になつて出品物も惡しき物を出すと賞金が取れぬ故、惡しき物なら出すなと云ふことになつて種々工夫を凝らし改良を施し、彼一歩進まば吾も亦一歩進まざるを得ない、所で、一は優等になるために品質を擇ばしめ一は多數を望むために、百に對し五、十の當り籤を作り、三品出せるものは三本の籤を取ることが出來る法を設け、一は名譽のため一は利慾のため一は便宜のために奬勵したならばドシドシ出品するものがあらうと思ふ、斯くすれば、これまで七百の出品あるにより本年十一月に實行したならば尚一層の盛況を見るにちがひなかろう、是等は品評會を奬むるにあらずして村方に於ては是非共基本財産がなければならぬ故に其方法として面白く樂しく基本金が出來るから申しました、併し最も注意を仰ぐは村の教育基金が千圓纏まることが肝要で、千圓になるとしめたものである、それで何れの町村に於ても高き位置にあるものは、兎に角其下層にあるものが多くある故に下層のものが大切である、其下層のものを導いて中途にして挫けざるやうにせねばならぬ、私が下女下男を使ふて夫れに對して貯金を命ずるに、始め五錢位さするも、まるで給金をへらさるゝやうな顏をなせども、一圓以上になるとしめたもので、終には五錢といへば拾錢、拾錢といへば拾五錢と云ふて臨時のものも自ら之を蓄ふるに至るのである、町村の貯金も之と同樣で少なくとも千圓積めば各自皆慾心生じ大切にして貯蓄するやうになるもので、我村にても前述の如くにして得た金を各自皆、其中には出品物の代金もある、イヤ何もある、かもあると云ふて、何人でも自分の出品物の賣揚げ代金が千圓の幾分であろうとも、宛も自分のものゝ如くに考へて、非常に煩腦心を生じ益々慾張るやうになる、最早其時は吾々が冥土へ行くも、人民は品評會と教育品展覽會とを忘れぬに至るから、私共は安心して成佛が出來るのである、私の村の形勢は此の如くであるが、御郡にても漸々適當なる方法により、二三十年を期せられて貯金をなし、立派な獨立した學校

を立てられんことを希望して止まぬのである、さりながら學校の基本財産に付ては、只今の如くして漸次永續を計るに務めて居りまして吾々は品評會のために、辨當をさげ、會計もやる、審査もやる、書記もやるなど、自費にて盡力するも、若しも家計が左前になると十品出したものが五品も出せないやうになりて何分困つてくる、斯くなると次第に貧乏するものが多くなるに從て富者は益々富み、貧富の懸隔が甚しくなる、茲に於てか教育事業に對して十分なる力を盡すことが出來なくなるに至る、所で、富むもの益々富み貧きもの益々貧しくなるは近世の通例である、然かも立國の民は年を加ふるに從ひ其富力を增すべきに、反て反比例になつたならば教育も實業も共に衰退して、皆此の影響を免れない、して見ると五十年を期したのが又中止の運命に立ち至るであろう、若し町村が下行して左樣な事の出來ぬ場合もなきにあらざれば之が豫防をせねばならぬ、所で、御郡にて此等に關する十五の組合のあるのは、結構である、故に今更喋々する必要はないが併し乍ら私は一通り此の手段を申さゞるを得ない、富むものは益々富むと同時に貧乏人をして務めて資財を豐かならしめんために信用組合を作るので、其組合は普通のものより一層親切、機敏、簡易、で然も其貸借の有樣が無抵當、低利、期限が長い、の三條件を具備せるを以て貧乏人が割合に多き金儲けをすることが出來るのである、地主と小作人との關係の如く御承知の通り小作人が米を取るは地主よりも多い、夫は一方は努力を計算に置くを以てゝある、又其資本を費やさずして其收得物を半分にするときは小作人は所得が多いわけである、富者よりは貧者が金を儲けることが多い之れ勞力を計算に入れるからである、富者が商業を起すには手代を使ひ又相當の資本も注がなければならぬ然るに下層の人民は祭典などに露店を開いて飲食物を賣らんとして資本に對し努力して金儲けをなすこと三割五分乃至四割である又金持が金を儲けることは資本に對して甚だ僅かである、然らば金持と貧者が無くならなければならぬ、所が、貧者は益々貧になるは之れ資本を求むるに困難であるからである、此の細民は資本金十圓を得るには證書には十圓であるが現金の入るのは七圓である三圓は三割で高利貸に差引かる、資本で引かれるから遂に一割が一割五分に當る、若し銀行に行けば抵當がなければ金を貸さぬ然らば如何にして貧者は金を借りるかと云ふと高利貸によるの外はない所が高利貸は二月シバリ三月シバリとて借りたる時と返す時に二重のオドリを取られるから借方は其利率は三四五割となる然し假りに貸し方から考ふると高利貸は無抵當で金を貸すから無理でない十中二三人位の貸倒れの出來ぬとも知れぬといふのである、去りとて其資本が高利であるからと云ふたならば下層の人民は借りられぬ若し下層の人民に滿足を得せしむるならば、高利貸は二三ヶ月にして身代限りとなる、此の如き次第なれば貧者が金を借りることは甚だ難い、又文明の農工銀行と云ふ機關が發達せざるが故に農夫が直接に運用することが出來ない、假令此の活路により急に金を借りんとしても十人にして連帶にて何日に金が入用としても中々捺印せぬから遂には六日の菖蒲、十日の菊となつて資本の入用の時期が過ぎて役に立たぬ、是に於て庶民の勸業に必要なるは信用組合にして是れ即ち信用組合の發起された所以なのである、而して銀行の活潑に働いて社會金融の唯一の機關となりたるは、この信用組合である、若しも此の如き組合が發達しないで富むものは益々富み貧なるものは益々貧になつて貧富が年一年と反比例に進むならば社會黨などが行はれる故に此の點に付て歐州の學者が貧富の平均を成べく計り而して社會の平和の亂れぬことを專ら希望して居るが、勿論貧富の差甚しきを加へざる樣、つまり年一年接近する樣しなければならぬ若しも今日の儘に放任するならば必ず各地より云ふべからざる黨派議論の起りて、それを譬ふれば丁度夏期天水桶に子子が出來ると同樣にして種をまかずとも期せずして一時に出來るは之れ自然の趨勢にして實に社會の平和を破ることを免かれぬ其平和攪亂を未發に防ぐ藥がなければならぬ、然るに信用組合といふものは其の藥である、されば信用組合はそれに必要なる資本を貸す例へば農業者ならば作物の肥料、田畑の買入代、農牛、農馬、農具等、商工業者に對しては原料、機械、器具等、勞働者に對しては車、馬等、是等のものが資本を求むることに對しては低利に貸すことが主なる働きである加之貯蓄の奬勵をして貯金を年四分とか或は五分とかの利を附して預かり、之れを他に貸して一割とか九分とかで貸附けて之れを組合に利益の分配をする、即ち借り手から組合に拂つた利は貯金者のがはから中すと五分の利を取つて組合にては其上四分或は五分を增して九分か一割の利にて貸すと殘り四五分は資本の上に利となる即ち二重の利益を得ることゝなるのである、一方

に於ては必要なる産業機械購入を便にし一方に於ては産業組合の發達を計り一致協同以て無益の費を省きて村内の風儀を矯正するは即ち信用組合の間接の働である又教育の資金を貯ふるには品評會を開くとか或は軍人の入營除隊等に縮緬の旗などを立て飲食する等の贅澤を極むるよりは遺族に對し相當に救護して遠征者に對する内顧の患なからしめんとし又一方に於ては必要なる規約を結んで元旦に飲食の回禮をなすは之れ亦止めて村の鎮守に會合し天皇陛下の萬歳を祝し年始廻りの手間を省く等成るべく簡易にして文明的に不体裁なき様にすること之れ亦信用組合の一事業としてもよからん、是等はやらうとすれば必ず出來る即ち入新井村の如きも種々の世話人が集まつて吊問會葬年始の事業を世話するのである。

又小學校には實業教育が必要で之れ亦有志者がやつて居る、此の實業教育に付て御話しますが入新井村は小村であつて高等も二ヶ年である、村に於ては六分は農で四分は雜商である、かく多數に農があるから此の子弟に對しては普通教育のみではならぬを以て傍ら農業を奬勵して肥料の性質、肥料を施す方法と云ふ様なことも子供の時より教へて居るが役場でも未來の相續人として我々の子供には必要なりと云ふ様になつて本村有志のものも同様に又多數農業者の父兄から提出して昨年八十八夜より特別の金を以て百八十歩だけを購ひ燐酸各種の肥料、海産各種の肥料等を特別に購入して生徒にあてがひ校長自ら指導してやる、遂に八十八夜から十二月三十一日まで決算して二圓八十三錢といふ金が出來た其一割を學校基本財産に寄附せしめ殘りは出席生の頭割に配當して八錢から拾貳錢になつて校長が之れを信用組合に預け生徒各自には一冊づゝの通帳を持たしめ年々利益の配當を此の通帳に記入する約束をして渡した、すると生徒が比較的面白くやつて通帳を渡してより一割を基本財産にし九割を分配することにした其後僅かの日數なれども最早今日では使ひをして得た報酬や品物の賣捌き、親類などで貰た金を自分の手より學校に持ち來りて貯金して呉れと申し出でたものも大分あつた、そして一人前凡金參圓貳拾錢になつた而してかゝる積立金は誠に德用である、世の中に貯金するものも多くあるが、生徒などは今日は貯金日なりとて各自父兄より貰つてくるが之れ教養上大に害があると思ふ、自ら汗を流し自ら勞して得た金錢にあらずして貯金するは恰かも濡れ手で泡をつかむが如くで實にいかぬ、即ち只今の貯金を一層奬勵するには實業と伴はなければならない、特に高等の學校に於ては其學校に對して田畠を設けて生徒に實業をなさしめ貯金せしむれば其學校にて理想を實行せしめたのである、生徒が此の如き利益の方法を計ると云ふに至りしならば實業と教育と結び付けたのであると思ふのである、どうか、實業教育は其土地の狀況により農業養蠶等にて其純益を貯金したいのである、然し乍ら此の貯金も貯めると云ふことより機に臨んで散財すると云ふ主意で學校にて教へて貰ひたいのである、つまりよく集めよく散ずると云ふことは經濟の本原である、今の經濟家が世にツマハジキさるゝものは散ずることを知らぬからである之れ即ち守錢奴といはれるものである又父の財を放蕩兒が湯水の如く使ふは散ずることを知りて集むることを知らぬものである、斯様に學校は、散せよといふにあらずして散せんことを教へんには集むる方法を考へねばならぬ、例へば暴風で學校が倒されたとか、公共の爲めに死を遂げたとか世間にはいくらもある茲に於てか校長たるものは注意して生徒に訓告しなかう〳〵云ふ時には金錢を使ふものなりと能々斯様の點に注意して力を注ぐは學校の事業として盡すべきである、餘り教科書のみに齷齪して力を勞するには及ばぬ、デ未來の人民は何であるかと云へば學校生徒である、されば今から勤儉の德を養ひ他日相續人となりて家を繼がしめたならば死したる父と繼げる子と相密着して永く其家を續けることが出來るのである、して見ると今日は根本的の教育をするに生徒に最もよき習慣をつけることが必要である、兎角武士は高揚子とて金錢を貴ばぬ習慣があつて東京の中央にては宵越の錢は使はぬなど之れ即ち日本橋の兄分であると云ふが實際我々共の幼時にはそうであつて二一天作の五などをするは武士に必要でない却て武士の品位が低くなるといふて士族のものには金錢を持たせぬ位であつた所で今金錢の貯蓄は必要であると口には言ふが之を實行するものは誠に少ない、我國にては實に少額にして貯金高七千三百萬圓である然るに瑞西では人口三百萬で貯金高は三億圓一人前百二十五圓餘、丁抹は殆ど我國の人口の二十分の一即二百萬であるが國民の貯金高は三億六千萬圓一人前百六十五圓、然るに日本は一人前一圓五十六錢である、之を比較すれば其貧富强弱如何ぞや實に小なる九州と同じ位の面積である、瑞西や丁抹でさへ三億といふ金を有するに日本は如此であ

る、況んや米國は四十七億圓獨逸は五十六億圓、日本は貯金の必要すら感じないで宵越の錢は使はぬといふので兎角つかひが立派過ぎる、所で貯金に熱心の金森通倫サンは一錢の愛國心は誰でも出來るだろう毎日一錢づゝ貯へることは誰でも出來る然るときは年三圓六十錢にて我國全體にては一億七千圓となる若し進んで十年の後には十七億八千萬圓出來る、地租增加であるとか營業稅增加とかは僅か一錢づゝの愛國心で容易く出來る、日に一錢位は一合の濁酒となり、一片の燒芋となり終はるべきに貯金箱を作り投入して置けば一ヶ年に驚くべき資本金となる即ち吾々の村にては既に四千六百圓となつてゐる其資本を借りて居るもの六十餘人ある、全國一萬五千の町村が一ヶ年を經たならば六千萬圓となる之れが若し十年を經ば六億圓は出來る、然るときは商業銀行は獨立することを得産業に必要なる事業を起し國の富力を增すに至るのである、然らば瑞西、丁抹の三億圓は驚くに足らんと信ずるのである、此の如くにして信用組合の金額も六億圓は難からず依て以て業を進め産を殖し種々に世の利益を增すことと無量大である、就ては此の信用組合と云ふことに付ても成るべく多く御郡に出來る樣に致したい、斯くして普ねく町村に及ばんことを希望して止みませぬ、猶教育トラストに付て鹿兒島縣下に於て實行したことを申上げたいと存じましたが最早時間が切迫しましたので夜中の步行も難澁であるからこれにて御免を蒙ります。

（本篇は明治三十七年一月二十四日本庄町部會に於て子爵の講演せられたる要領を筆記したるまゝにして演者の校閲を經ざるものなれば錯誤又は不明の點は其責本會にあり讀者これを諒せよ）

本郡教育の概況

一、學齡兒童就學に關する狀況

本縣學齡兒童の就學は從來長く各府縣の最下位にありしが明治三十四年、年長兒童特別學級規程を定め尋常小學校授業料を全廢せらるゝと同時に官衙町村共に銳意之れが督勵に勉められたる結果同年度以來一躍して全國の上位を占むるに至れり今本年度に於ける郡內各町村の就學步合を示せば左の如し

兒玉郡學齡兒童就學調査表　明治三十七年四月末日現在

町村	學齡兒童數 男	學齡兒童數 女	學齡兒童數 計	學齡就學兒童數 男	學齡就學兒童數 女	學齡就學兒童數 計	學齡不就學兒童數 男	學齡不就學兒童數 女	學齡不就學兒童數 計	學齡就學步合 男	學齡就學步合 女	學齡就學步合 計
本庄町	六五一	六九一	一三四二	六四一	六七九	一三二〇	一〇	一二	二二	九八、四六	九八、二六	九八、三六
兒玉町	三七六	三四二	七一八	三六一	三二二	六八三	一五	二〇	三五	九六、〇一	九四、一五	九五、一三
丹庄村	三二八	三〇八	六三六	三二二	二八四	六〇六	六	二四	三〇	九八、一七	九二、二一	九五、二八
青柳村	一九二	一七六	三六八	一八八	一六一	三四九	四	一五	一九	九七、九二	九一、四八	九四、八四
北泉村	二八一	二五三	五三四	二七八	二四六	五二四	三	七	一〇	九八、九三	九七、二一	九八、一三
旭村	二七二	二四五	五一七	二六七	二四三	五一〇	五	二	七	九八、一六	九九、一八	九八、六五
仁手村	一六九	一六九	三三八	一六九	一六八	三三七	〇	一	一	一〇〇、〇〇	九九、四〇	九九、六八
七本木村	二二一	一九一	四二二	二二六	一六五	三九一	五	二六	三一	九七、八四	八六、三九	九二、六五
長幡村	二五二	二二五	四七七	二四七	二〇六	四五三	五	一九	二四	九八、〇二	九一、五六	九四、九七
藤田村	三三〇	三〇九	六三九	三二〇	二八二	六〇二	一〇	二七	三七	九九、九七	九一、二六	九四、二一
大澤村	二四二	二二九	四八一	二三九	二二一	四七〇	三	八	一一	九八、七六	九六、六五	九七、七一
神保原村	一九八	一八五	三八三	一九四	一七三	三六七	四	一二	一六	九七、九八	九三、五一	九五、八三
東兒玉村	三五九	三五六	七一五	三四七	三二七	六七四	一二	二九	四一	九六、六七	九一、八五	九四、二七
秋平村	二一六	一九四	四一〇	二一三	一九一	四〇四	三	六	九	九八、六一	九八、四五	九八、五四
本泉村	一七三	一七四	三四七	一七〇	一六六	三三六	三	八	一一	九八、二七	九五、四〇	九六、八三
松久村	三二四	二八六	六一〇	三一〇	二六〇	五七〇	一四	二六	四〇	九五、六八	九〇、九一	九三、四四

共和村	三〇三	二九三	五九六	二九五	二五八	五五三	八	三五	四三	九七、三六	八八、〇五	九二、七九
金屋村	二五八	二七八	五三六	二五一	二五一	五〇二	七	二七	三四	九七、二九	九〇、二九	九三、六六
賀美村	二六一	二二一	四八二	二五七	二〇四	四六一	四	一七	二一	九八、四七	九二、三一	九五、六四
若泉村	二〇三	一九八	四〇一	二〇二	一九三	三九五	一	五	六	九九、五一	九七、四七	九八、五〇
計	五六一九	五三三三	一〇九五一	五四九七	五〇一〇	一〇五〇七	一二一	三一三	四四五	九七、八三	九三、九四	九五、九五

二、自明治三十六年九月至同三十七年七月兒玉郡尋常小學校生徒出席歩合

學校名 就學歩合 九月 十月 十一月 十二月 一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 平均

仁里	九六、六八	九八、三〇	九六、三九	九六、四五	九五、八五	九六、三九	九七、〇五	九四、八七	九五、一八	九六、八二	九二、七九	九三、六六	九四、五三
秋平	九八、五四	九四、八八	九四、四四	九六、二四	九七、〇五	九七、〇九	九六、三二	九六、四〇	九四、二二	九三、三四	九五、七二	九一、九一	九五、五一
本庄	九八、三六	九一、二〇	九三、〇二	九三、七八	九〇、六五	九二、〇九	九二、二六	九四、〇六	九二、三二	九一、六九	九一、三二	九一、九一	九二、四七
旭	九八、六五	九〇、八六	九三、九〇	九二、二五	九一、六八	九二、七一	九三、八〇	九四、九二	九二、二二	八六、四九	八五、三六	九〇、七七	九八、五〇
阿久原	九八、五〇	九〇、三六	九三、三八	九四、五三	九三、九〇	九二、六九	九二、三六	九〇、六七	九二、二六	八〇、〇九	八八、〇九	九二、七九	九〇、〇七
大澤	九七、七一	九二、九二	九三、一八	九一、〇五	九五、一五	九五、一五	九四、八四	九四、八四	九二、九三	九〇、七四	八三、一〇	九一、四四	九一、〇八
上喜太	九五、八三	九三、四三	九五、六七	九四、三四	九四、六五	九三、七八	九四、五一	九四、六七	九四、六七	八四、〇〇	七八、五九	九一、六八	九四、六七
青柳	九四、八四	八六、八五	九四、八六	九五、八六	九七、三九	九五、八二	九七、一〇	九五、七七	九五、〇九	八四、一四	七七、〇〇	八四、一四	九一、五七
第一金屋	九三、六六	九二、三五	九三、四九	九四、〇〇	九五、一〇	九四、三四	九三、一一	九四、一五	九三、一一	九〇、六五	九〇、七四	八九、一二	九二、四七
第二金屋	九三、六六	九四、二五	九三、九二	九四、一六	九六、四九	九三、四四	九四、三三	九三、三三	九六、〇二	八八、七四	七八、六五	八八、四三	九一、九一
渡瀬	九八、五〇	八四、九六	八三、三三	八五、三三	八五、一一	八五、六六	八五、一二	八九、九三	九三、五一	九〇、四一	八六、一九	八三、一三	八六、七八
兒玉	九五、一三	八八、七九	九〇、九一	九〇、四〇	九〇、九八	八九、二九	八九、一六	九四、五一	九一、〇一	九〇、〇九	九一、〇一	八九、九一	八六、六四
本泉	九六、八三	八八、六六	八八、四二	九二、〇一	九四、九三	八九、〇二	八七、六九	九一、〇一	九五、〇五	七三、二八	八五、一二	八二、三四	八七、九六

太駄	九六、八三	八九、二〇	九二、〇〇	九二、五一	九〇、四八	八六、五八	八三、二八	八〇、七〇	九一、七八	八六、五八	八二、六六	八六、四二	八七、四七
乾武	九五、六四	八八、一七	九〇、八一	八八、九二	八九、〇六	八七、九三	八七、三五	九〇、五一	九一、五五	八七、八四	八二、五五	八八、五六	八八、三一
七本木	九二、六五	九〇、五七	九一、六五	八九、三五	九一、二九	九一、三九	九四、七三	八九、八〇	八九、九六	九一、一一	九一、二三	八九、八六	九〇、九一
北泉	九八、一三	八三、七四	八八、一四	八一、九二	八〇、六九	八七、九〇	八六、九八	八九、三六	八九、三六	七七、五五	六五、一七	七六、八四	八二、五一
長幡	九四、九七	八四、四四	八七、三八	八一、一九	八三、八五	八七、七七	八九、七八	八八、九三	九一、五四	八七、〇九	七六、一九	七九、九四	八五、二八
第二丹庄	九五、二八	八四、一九	八一、〇一	八二、六七	八五、〇六	八三、六五	八七、五〇	八七、六二	八九、三五	八八、二四	八一、六八	八三、五六	八四、九六
共進	九二、七九	八八、七〇	九〇、〇八	八八、六七	八九、二〇	九一、〇〇	八九、四八	九二、三七	八七、九五	八七、一四	七九、三九	七六、七〇	八七、二四
丹庄	九五、二八	七七、七八	八〇、三五	七八、六六	七八、六四	九八、五二	八四、一三	八五、九四	八五、七五	八三、八七	七七、一六	八二、六三	八三、〇四
藤田	九四、二二	七八、四一	八一、二八	七六、五二	七八、七〇	八六、〇七	八八、一七	八九、〇〇	八六、〇三	七九、一四	七〇、四五	七六、〇五	八〇、八八
那珂	九三、四四	七九、三八	八二、三二	七八、五九	八〇、五九	八一、五七	八二、二八	八四、五八	八二、七六	七四、九三	七五、七五	八〇、四二
東兒玉	九四、二七	六二、一二	七六、一二	七二、〇九	七一、九五	七九、二二	七九、〇九	七八、五八	七八、三三	七二、六四	五九、六七	六二、五七	七二、〇三
平均	九六、四一	八六、〇八	八八、九七	八六、八一	八七、八八	八八、八〇	八八、一五	八九、七四	八九、九三	八七、〇三	八〇、五五	八三、九〇	八七、〇八

備考 出席歩合ノ平均ハ最近一ケ年間即チ明治三十六年九月ヨリ同三十七年七月マテ（八月ノ暑中休業ヲ除ク）十一ケ月間ノ總出席數ヲ十一分シテ算出セリ學校ノ席次ハ前項出席歩合ト就學歩合トノ和ヲ二分シテ之ヲ定メタリ

自明治三十六年九月至同三十七年七月兒玉郡高等小學校生徒出席歩合

學校名 九月 十月 十一月 十二月 一月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 平均

兒玉	九四、〇一	九七、三六	九三、五八	九三、五六	九五、三五	九七、四九	九七、六三	九八、六〇	九七、三五	九三、一二	九三、八八	九五、六三
藤田	九二、七九	九七、四四	九〇、八〇	九三、七〇	九八、一二	九七、〇〇	九九、三三	九九、二八	九四、二一	八六、八七	九四、七一	九五、一五
本庄	九三、四四	九五、八五	九四、六四	九五、五八	九六、一六	九五、四一	九五、三七	九七、一四	九六、一六	八九、五六	九三、九二	九四、五三

阿久原	八九、五〇	九二、九三	九〇、六〇	九五、二〇	九四、三七	九四、六〇	九六、二一	八六、九八	八五、六一	九五、一四	九二、三四
那珂	九三、〇四	九四、九三	九〇、五六	九二、〇三	九一、八四	九三、一五	九五、二九	九四、九〇	七九、〇六	八五、一四	九一、四五
賀美	九〇、一〇	九一、九〇	八六、一〇	九二、八〇	九三、二〇	九五、〇五	九四、七八	九〇、三七	九一、〇二	八一、九四	八八、三七	九〇、四二
北泉	九四、七〇	九四、三三	八四、〇六	八一、六〇	九五、八五	九六、五〇	九七、七九	九六、九六	九二、二九	七七、一二	八三、二五	九〇、四〇
東兒玉	九三、〇〇	九一、七一	八一、八三	七八、八二	八八、八五	九四、六八	九六、二五	九五、〇六	九三、六〇	八二、六七	八五、三七	八九、二六
平均	九二、二〇	九五、四二	九〇、五四	九二、〇二	九三、八六	九四、五四	九六、三六	九六、二八	九四、四三	八六、七四	九一、二六	九三、〇八

三、小學校舍の設備に關する狀況

小學校舍の設備に就ては當局官廳と町村と共に鋭意其完成に力められたる結果本年度に於ては殆ど全部の設備を了する狀況なりしに時局のために數校を剩して中止するの止むを得ざるに至れり今各學校につきて其設備の狀況を示せば左の如し

兒玉郡小學校舍設備表　明治三十七年九月末日現在

學校名	設備ニ關スル摘要
本庄	明治二十五年九月新築同三十年三月增築
藤田	明治二十五年五月新築同三十二年五月增築
仁里	明治二十六年九月新築同三十三年四月增築同三十四年八月舊校舍修築
旭	明治三十三年十月新築
北泉	明治二十八年四月新築同三十二年六月增築
東兒玉	一部寺院假用、一部明治二十六年四月新築同三十年十月增築
共進	寺院及民家假用
兒玉	明治二十年十月新築
第一金屋	明治二十三年五月新築同三十三年十二月增築及修築
第二金屋	明治三十三年十二月新築
青柳	明治三十七年四月新築
渡瀬	明治十九年十月新築
阿久原	明治二十九年十月新築
本泉	寺院假用
太駄	明治二十四年十月新築
上太喜	明治二十七年三月新築同三十五年三月增築同三十五年九月舊校舍修築
七本木	明治十五年新築同三十年增築
長幡	明治三十五年十二月新築
丹莊	廢寺假用
第二丹莊	寺院假用
秋平	明治三十二年五月新築
那珂	明治二十三年九月新築同三十年十二月增築同三十五年十月增築
大澤	明治三十七年五月新築
本庄高等	明治三十三年十一月新築同三十六年十二月增築
兒玉高等	明治二十一年十一月新築同二十九年增築同三十二年增築同三十六年十二月增築
賀美高等	一部民家假用、一部明治三十年新築同三十一年增築同三十四年八月增築

四、小學校兒童貯金に關する狀況

小學校兒童貯金に就ては監督官廳學校共に近來之が奬勵に勉められ本會に於ても聊努力しつゝありしに偶本年

二月の開戰となり時勢と相應して兒童の貯蓄心を促がしたる結果著しく貯金高の增加を見るに至れり今各學校につき調査せるものを示せば左の如し

兒玉郡小學校兒童貯金高調　三十七年十一月一日現在

學校名	貯金總額	貯金人員	平均一人ノ貯金額
	圓		圓
本庄高等	八四五、六九二	二七三	三、〇九八
本庄	五二九、八〇五	五一八	一〇、二三
藤田	一七七、四二五	九九	一、七九二
旭	四六、九五七	二〇六	二三八
北泉	二一〇、二三〇	八七	二、四一六
東兒玉	六二、〇七一	六八	九一三
共進	五四、三五〇	六五	八三六
兒玉高等	五〇九、〇四五	二〇六	二、四七一
兒玉	三八五、五四〇	一一三	三、四一二
丹莊	二五、二一〇	一二〇	二一〇
第二丹莊	八、一〇〇	二六	三一二
秋平	一五、三九〇	九四	一、六四
大澤	三九七、五四六	一四七	二、七〇四
賀美高等			
學校名	貯金總額	貯金人員	平均一人ノ貯金額
	圓		圓
第一金屋	四九、七五五	九三	五三五
第二金屋	一八、五〇〇	二四	七七一
青柳	二七、一九〇	六六	四一二
渡瀨	四六、二九二	四九	九四五
阿久原	二一八、一一五	四八	四、五四四
上喜太	七一、七〇〇	一一八	六〇八
乾武	一〇三、二九七	七八	一、三二四
七本木	一、九九〇	七	二、八四三
長幡	五〇、八七五	一六九	三〇一
仁里	一二六、三四〇	一〇四	一、二一五
本泉	三、四〇〇	一五	二二七
那珂	一二、八〇〇	三七	三一九
太駄	一八、五〇〇	五三	三四九
計	四〇三、〇二五	二八八三	一、三九九

五、實業學校に關する狀況

競進社蠶業學校は明治三十二年の設立に係る組合立乙種實業學校にして修業年限は本科二ヶ年別科六ヶ月とす學科は本科に在りては、修身、讀書、作文、地理、歷史、數學、理化、博物、氣候、養蠶、製種、蠶體解剖、蠶體生理、蠶體病理、製絲、桑樹栽培、農業大意、經濟實習とし、別科に在りては修身、理化、博物、桑樹栽培、蠶體解剖、蠶體生理、蠶體病理、養蠶製種、製絲、實習、とす、校舍は教室三(五十坪)講堂一、(二十坪)實習室四、(四十二坪七合)及教員室、事務室、器械室、應接室、生徒控所等計四十一坪五合あり而して校舍敷地は五百八十坪にして實習地桑園二町八反八畝十五歩を有せり圖書は百六十三種二百八冊此價格百五拾四圓七拾錢、器械標本類八十九種五千三百七十三個此價格千九百八拾七圓六拾八錢とす、現在生徒は本科一學年五名、二學年五名、計十名にして別科生は本年八月卒業し次の募集は來年三月に於てするものとす、創立以來卒業生は本科十四名、別科百二十八人計百四十二人にして卒業後の狀況は過半養蠶教師となり其他は實業に從事し他の職業に就きたるもの及他の官公立學校に入學したるものは極めて僅少なり、經費は三十六年精算總額三千七百七拾四圓五拾六錢にして三十三年度より本年度まで五ヶ年は實業教育費國庫補助法により國庫より年々八百圓づゝを補助せらる、學校と實業との關係に就ては本校職員校務の餘暇を以て當業者の需に應じ蠶業上の講話をなし又は質問に應じ且地方に必要なる試驗又は取調をなし斯業の改良發達に盡力せり、

六、教育費及基本財產に關する狀況

明治三十七年度郡內町村立小學校教育費豫算總額は經常費參萬四千九百拾參圓九拾五錢七厘臨時費貳百六拾壹圓にして之を前年度に比するに經常費七千貳百四拾七圓八拾四錢七厘臨時費七千九百六拾五圓參拾七錢を減せり斯くの如き多大の減額を來したるは主として時局の影響に因るものとす、

小學校基本財產は七千五百八拾八圓拾參錢參厘にして洵に僅少の額とす而も近來各町村共銳意之が蓄積の方法を講じ秋平村の如きは風俗矯正會に於て冠婚葬祭等吉凶の場合費用を節約して學校基本財產に寄附することを約束したる結果僅かに一ヶ年間にして百七拾六圓餘の基本財產を得たるを見れば適當なる方法によりて孜々蓄積に努力せば其成功期して待つべきなり今各町村に於ける教育費豫算額及小學校基本財產額を示せば左の如し

本郡教育の概況

町村名	種別	卅七年度町村教育費豫算額 經常部歳出	臨時部歳出	三十七年十一月一日現在小學校基本財産額
本庄町		三三六、一〇九〇	—	三七、〇〇〇
藤田村		二二一九、七五〇	—	—
仁手村		七六四、一〇〇	—	四〇、七二三
旭村		八八〇、三七二	—	—
北泉村		一五二、三二〇	—	山林價格 四六〇〇、〇〇〇
東兒玉村		二一二、九三〇	—	—
共和村		一〇二三、三三〇	二六一、〇〇〇	—
兒玉町		一八七、一八九〇	—	五、〇〇〇
金屋村		一二七七、〇九〇	—	—
青柳村		八七四、五八〇	—	波瀬區 一六〇、〇〇〇
若泉村		一六九五、一三〇	—	阿久原區 三一〇、〇〇〇
本泉村		七六六、〇〇〇	—	本泉區 三〇〇、〇〇〇
神保原村		七五〇、二六〇	—	—
賀美村		八〇四、六三〇	—	—
七本木村		九八五、六〇七	—	—
長幡村		八九八、一四二	—	—
丹莊村		一四九五、九三五	—	三五、〇〇〇
秋平村		七五七、一九〇	—	一七六、〇〇〇
松久村		一五四一、四八〇	—	—
大澤村		九二四、六〇三	—	—
本庄町外二ヶ村學校組合		三六九二、二四〇	—	一〇〇、〇〇〇
兒玉町外五ヶ村學校組合		二七三二、四九〇	—	—
七本木村外三ヶ村學校組合		一九七三、八一〇	—	—
計		三四九一三、九五七	二六一、〇〇〇	七五八八、一三三

七、學校衛生に關する狀況

學校衛生に就ては近來漸く注意せらるゝに至り學校清潔法は稍行き屆きたるも學校醫を設置せるは僅に九校に過ぎず隨て學校衛生上遺憾の點少ならざるを覺ゆ望むらくは將來各學校共校醫を置き小學校令第一條の趣旨を貫徹するに於て遺漏なからしめたし今現在校醫及其手當を示せば左の如し

兒玉郡小學校々醫表

學校名	手當	氏名
本庄高等	年額貳拾圓	森賢司
本庄尋常	同貳拾五圓	中澤力
藤田	同拾五圓	岡善次郎
兒玉高等	同拾五圓	中神貞作
兒玉尋常	同拾五圓	中神貞作
上喜太	同拾參圓	池田義之助
北泉	同五圓	武藤九一
丹庄	同拾貳圓	伊古田周道
第二丹庄		

八、教員講習會に關する狀況

小學校教員講習會は全郡一團体にして之を五部に分ち總集會毎年三回部集會毎月一回とし教務に關する研究をなし夏期休業期に於ては年々一週間乃至二週間斯道に經驗ある學者を聘して緊要學科の講習をなすを例とせり三十六年度の講習學科は教授法（講師東京高等師範學校訓導後藤胤保）手工（講師三重縣師範學校教諭高橋榮五郎）の二科にして各一週間づゝ講習せり講習人員は教授法に於て七十四人手工に於て九十二人經費は兩科を通じて總計百壹圓貳拾錢を要せり三十七年度は適當なる講師を得ざりき

九、小學校に關する表彰の狀況

明治三十三年十一月埼玉縣訓令第百十三號學事奬勵規定に依り本郡内に於て本縣より奬勵品を下賜せられたるもの左の如し

明治三十三年度

一庶物標本　壹組　兒玉郡　秋平尋常小學校
一同　同　阿久原尋常小學校
一印　函　壹個　同　金屋尋常小學校訓導兼校長　島田安蘇太郎
一同　同　七本木尋常小學校訓導兼校長　井上三郎
一字書　壹部　同　長幡尋常小學校生徒　石原舛太郎
一印　函　壹個　同　秋平村長　田中磯吉
一同　同　藤田村長　山田忠治

明治三十四年度

一庶物標本　壹組　兒玉郡　旭尋常小學校
一同　同　第一金屋尋常小學校
一同　同　第二金屋尋常小學校
一同　同　本庄尋常小學校
一同　同　仁里尋常小學校
一印　函　壹個　同　那珂尋常高等小學校訓導兼校長　大木臺三郎
一同　同　阿久原尋常高等小學校訓導兼校長　淺見慶三郎
一同　同　乾武尋常小學校訓導兼校長　木村源次郎
一同　同　本庄町長　松本文作
一同　同　仁手村長　茂木安太
一同　同　秋平村學務委員　小茂田磯五郎

明治三十五年四月埼玉縣令第二十六號學事奬勵規則に依り本郡内に於て本縣より奬勵金を下賜せられたるもの左の如し

明治三十五年度

一金參拾圓　兒玉郡阿久原尋常高等小學校訓導兼校長　淺見慶三郎
一同　同　仁里尋常小學校訓導兼校長　橋本太橘
一同　同　渡瀬尋常小學校訓導兼校長　原金三郎
一同　同　秋平村長　田中磯吉
一同　同　仁手村長　茂木安太
一同　同　本庄町　鳥羽正時
一金百圓　同　本庄高等小學校
明治三十六年度
一金參拾圓　兒玉郡那珂尋常高等小學校訓導兼校長　大木臺三郎
一同　同　秋平尋常小學校訓導兼校長　福田直次郎
一同　同　乾武尋常小學校訓導兼校長　木村源次郎
一同　同　本庄町長　松本文作
一同　同　藤田村長　山田忠治
一金百圓　同　本庄尋常小學校
備考　明治二十九年三月法律第六號を以て償金特別會計法を定め償金及其利子は一般の歳入歳出と區分

し特別會計を設けられたり此法律に基き三十二年三月法律第八十號を以て教育基金特別會計法を定め償金特別會計資金の内一千萬圓を教育基金に組入れ其收入を普通教育費に使用せらるゝことゝなれり此法律により同年十一月勅令第四百三十五號を以て教育基金令を發布せられ毎年度豫算に於て定まりたる金額を學齢兒童數に應じて各府縣に配當し教育資金となし特別會計を設け市町村立尋常小學校の校地校舎を設備する費用に充つるため市町村立町村組合町村學校組合に貸付け又は補助せしめ且配當金額十分の三以内を限り文部大臣の認可を受け市町村立小學校教員の奬勵其他普通教育に關する費用に充つることを得せしめたり是に於て本縣は同年十二月埼玉縣令第六十八號を以て教育資金使用に關する規則を定め尋常小學校設備費貸付に關する方法を規定し三十五年四月埼玉縣令第二十六號を以て學事奬勵規則を定め小學校に關する成績又は功勞を表彰するため奬勵金を交附せらるゝことゝなれり前記三十五年以降の表彰は此規則に依りたるものとす

本會記事

一　本會創立の起因及經過

我兒玉郡の教育機關は明治二十六年埼玉私立教育會の定款によりて設立せる同會の支會ありて郡教育上稗益少なからざりしも設立以來十年の星霜を經たる今日としては其組織實際に適せざる點あるを以て一昨年來之が改設の議起り幾回か同志の間に評議ありしが昨年に至り其時機漸く熟し同年一月東郷重清、茂木小平、小林濱次郎、田島紋次郎、須賀丈太郎、五十嵐犬三、杉山仲五郎、下山正作、竹内牟三郎の諸氏凝議の上設立趣意書及會則草案を作り同志に謀りしに發起者總員七十八人を得たり、同年二月十五日第一回發起人會を開き會則及會員募集方法を協議し小林濱次郎、田島紋次郎、鳥羽正時、山脇傳太郎、三輪宰吉郎、田中磯吉、吉川由五郎の七氏を創立委員に推選せり、同年三月五日創立委員は設立趣意書及會則草案千四百枚を印刷して各發起人に配布し會員募集に着手せり、同年四月三日第二回發起人會を開き創立總會に關する諸般の事項を決議せり、同月七日創立會講師招聘の爲め田島委員上京、同月十日曩に茂木小平氏を總代として其筋に申請せる本會設立の件認可せらる、以上昨年一月より同年四月十八日に至る迄本會創立に要せし經費は金拾貳圓四拾錢八厘にして同日迄に入會せる會員は千十七人なり

二　會務の報告

明治三十六年四月より同三十七年九月迄に實施したる本會事業の要領左の如し

一、風俗矯正等に關する件

教育上直接の問題は法律規則に依りて當局の之を監督するありと雖間接の問題は民衆自ら改善するの外其責に任ずるものなし是に於て乎地方風俗の矯正の如き教育上大なる關係ある事項は本會の主として努力すべき事項たり依て本會は第一着に新暦正月の實行盆踊の廢止を實行したるに殆んど其効果を奏したり又教育事業は殖産の發達と互に相俟つを以て力めて教育勸業の連絡一致を圖り農事改良勤儉貯蓄等の事項は實業團体と毎に歩調を一にせんことを期したり本庄部會に於て全國農事會幹事長を招聘したる仁手部會に於て熊谷農學校教諭を招聘したる各部會の演説談話に概ね勸業に關する事項を加へたるが如き此趣旨に外ならず

二、教育行政に關する件

教育行政に關し請願又は建議せるもの二件あり一は三十七年度より國定教科書採用の必要を認め知事に請願せる者にして一は町村教育費補助繼續の必要を認め之を知事に請願すると同時に縣會に建議せるものとす後者は縣會の可決する所となりしも時局の爲めに變更せられ前者は採用せられざりき

三、他の教育團体に關する件

埼玉私立教育會の主催せる各郡教育團体の協議會及入間郡教育會主催の各郡聯合教育會組織に關する協議會へ本會代表者を出席せしめ本縣に系統的教育會を組織する前に先以て各郡聯合教育會を組織することを協定せり

四、教育上の事項調査に關する件

文部省内に設置せる國語調査會より本縣廳を經て依頼せられたる此地方に行はるゝ音韻及口語法を調査し同會に回答せり

五、教育に關する演説談話會及教育品展覽會に關する件

演説談話會は昨年十二月より本年四月に亘り幻燈會展覽會と同時に各部會に於て之を開會せり展覽會は各學

校の兒童成績物の出品千二百五十六點にして每會の縱覽人は通計一萬を下らざるべし演說談話會聽衆は最多數八百人最少數四十人通計約二千五百人にして幻燈會聽衆は最多數千二百人最少數四百人通計約一萬六百人とす演說會に講師を招聘したるは本庄部、仁手部のみにして其他は本會出張員を以てせり幻燈講話は開戰以前に於ては教育と實業との關係、公德、家庭教育等の範圍に於てせしも開戰後は戰況及戰時に於ける國民心得を材料とせり

六、學生々徒表彰に關する件

表彰生徒は各小學校長に依賴して生徒三百人に對し一人の割合を以て操行拔群學業優等にして特に勤勉なるものを選拔し之に表彰品を贈與せしに總員四十人を得たり

七、會報發行に關する件

會報は其休裁を本會記事、郡內學事、論說、投書、雜錄、彙報、兒童文藝の各欄に分つ事とし昨年十二月中に發行の豫定を以て編輯に從事せしに第一回總會の演說筆記未着の爲遂に本年二月となりて開戰に遭遇し豫定の体裁にては時宜に適せざるのみならず幻燈映畫の購入其他時局の爲に臨時の費用を要せしを以て經費上の都合をも慮り當分其体裁を變更して極めて簡略なるものとし緊要なる事項は別に隨時發行する事とし先づ戰時國民の心得を編纂して會員全体及各學校町村役場に配布せしが會報として前年度分と本年度分とを合せて今回第一號を發行することとなせり

八、時局に對する諸件

時局に對しては開戰後の幻燈會に於て大に努力せりと雖も會報の一部として戰時國民の心得を配布し之と共に學齡兒童の家族出征の爲町村の救護を受けつゝある者又は之か爲に就學の猶豫を申し立てたる者につきては之か救濟の途を講ずる方針を以て時々之を調査せるも未だ本會の助力を要せし者なし又會員出征者慰問の方法につきては現に調査中に屬す

九、會費徵收狀況に關する件

會費徵收は三十六年度第一期は成績良好なりしも同第二期及三十七年度第一期は稍不成績の狀あり各部評議員諸君の盡力を望む、

十、現在會員數

會員は創立以來多少の異動ありしも現在總數千九十四人あり

以上列擧せる本會の事業中特に風俗矯正に關する件及幻燈會展覽會に依りて一萬以上の男女老幼に講話見聞せしめたる、郡內四十人の優良生徒を表彰せる、時局に對する國民の心得につき指導せる等は現在及將來に於て教育上は勿論一般公益上裨益少からざるべきを信ず

各部會の狀況は左表の如し

町村名	摘要	出張員
藤田村	三十六年十二月十二日、十三日展覽會十二日幻燈會聽衆約六百人十三日午後談話會々衆約五十人	田島、松本、羽山三輪、內野幹事
大澤村	同二十四日、二十五日展覽會二十四日午後談話會々衆約五十人同夜幻燈會聽衆約四百人	田島、島田、吉川福田幹事、島羽評議員
神保原村	同十九日、二十日展覽會十九日夜幻燈會聽衆約四百人二十日午後談話會々衆約三十人	田島、三輪、羽山木村幹事、小林評議員
若泉村	三十七年一月五日、六日展覽會五日午後談話會々衆約二百人同夜幻燈會聽衆約五百人	田島、福田、吉川島田幹事
仁手村	同九日、十日展覽會九日午後談話會招聘辯士熊谷農學校教諭河田惠治君會衆約二百人同夜幻燈會聽衆約四百人	東郷會頭、田島、三輪、山脇幹事、島羽、小林評議員
丹庄村	同十六日、十七日展覽會十六日夜幻燈會聽衆約七百人十七日午後談話會々衆約八十人	田島、島田、福田吉川幹事
本庄町	同二十三日、二十四日展覽會二十四日演說會招聘辯士全國農事會幹事長子爵加納久宜君聽衆約八百人當日ハ本會ヨリ各部ヘ通知ヲ發セリ	會頭、副會頭、各幹事
本泉村	二月六日、七日展覽會六日午後談話會々衆約百人同夜幻燈會聽衆約四百人	田島、島田、福田吉川幹事
東兒玉村	一月三十日、三十一日展覽會三十日午後談話會々衆約七十人同夜幻燈會聽衆約五百人	田島、三輪、羽山幹事
七本木村	二月十三日、十四日展覽會十三日夜幻燈會聽衆約六百人十四日午後談話會々衆約八十人講談ノ餘興アリタリ	田島、三輪、羽山幹事
金屋村	同二十日、二十一日展覽會二十日午後談話會々衆約四十人同夜幻燈會聽衆約七百人	田島、吉川、島田幹事
旭村	同二十七日、二十八日展覽會二十七日午後談話會々衆約四百五十人同夜幻燈會聽衆約五百人	田島、三輪、羽山幹事
青柳村	三月五日、六日展覽會五日午後談話會々衆約四十人同夜幻燈會聽衆約五百人	田島、吉川、島田福田幹事
賀美村	同十二日、十三日展覽會十二日午後談話會々衆約五十人同夜幻燈會聽衆六百人	田島、三輪、羽山幹事、戸塚書記
兒玉町	同二十日、二十一日展覽會二十日夜幻燈會聽衆約八百人	田島、島田、福田吉川幹事
北泉村	同二十六日、二十七日展覽會二十六日午後談話會々衆約二百人同夜幻燈會聽衆約六百人	田島、山脇、三輪羽山幹事
秩平村	同二十九日、三十日展覽二十九日午後談話會衆約五十人同夜幻燈會聽衆約七百人	田島、島田、吉川三輪、羽山、福田幹事、引間郡書記
長幡村	四月二日、三日展覽會二日午後談話會々衆約四十人同夜幻燈會聽衆約四百人	田島、吉川、三輪幹事、戸塚書記、押川郡技士
松久村	同九日、十日展覽會九日午後談話會々衆約八十人同夜幻燈會聽衆約九百人	田嶋、島田、吉川福田幹事
共和村	同十六日、十七日展覽會十六日午後談話會々衆約五十人同夜幻燈會聽衆約三百人	田島、島田、吉川福田幹事

三　會務日誌（拔抄）

●明治三十六年四月十九日本會創立總會を本庄尋常小

學校に開く其概況左の如し

午前十時十分開會會員出席二百五十餘名小林濱次郎氏を議長として會則を議す一二修正動議ありしも原案に決す

同十時四十分役員選擧會を開き先づ各町村選出の評議員を定め直に評議員會を開き會頭推選副會頭幹事の選擧を行ひしに其結果左の如し

會頭　東郷重清君　副會頭　茂木小平君

幹事　山脇傳太郎君　三輪宰吉郎君　田島紋次郎君　内野武君　吉川由五郎君　島田安蘇太郎君　木村源次郎君　松本鶴太郎君　羽山好作君　福田直次郎君

評議員

本庄町　小林濱次郎君　鳥羽正時君
藤田村　山田忠治君　飯島辨次郎君
仁手村　茂木安太君　橋本太君
旭村　卜部喜平君　秋山龜太郎君
北泉村　荘田萬五郎君　貫井角太郎君
東兒玉村　下山正作君　上田樂三郎君
共和村　根岸伊十郎君　山田保之助君
兒玉町　井田春太郎君　吉川由五郎君
金屋村　倉林周平君　島田安蘇太郎君
青柳村　高階恒久君　柴崎順一郎君
若泉村　淺見慶三郎君　原金三郎君
長幡村　坂本喜藏君　松本彌平君
本泉村　坂本喜平君　島田順藏君
神保原村　竹内牢三郎君　神保億三君
賀美村　須賀丈太郎君　石原升太郎君
七本木村　金井丈吉君　松本鶴太郎君
丹庄村　關根菊次郎君　福島德三郎君
秋平村　田中磯吉君　福田直次郎君
松久村　山田綱太郎君　大木臺三郎君
大澤村　福島元次郎君　肝付直矢君

同十一時三十分發會式を行ひ敎育勅語の奉讀、會頭の告辭、發起人總代の創立事務報告、會員總代の祝詞あり正午式を畢る

午後一時演說會を宮森座に開く傍聽者會員を合せ約九百名にして辯士及演題左の如し

會員諸氏に告ぐ　本縣視學官　梶山延太郎君

敎育者の覺悟　高等師範學校長　嘉納治五郎君

第一席は約一時間にして第二席は二時間孰れも熱心に講せられ特に有益なる演說にして深く聽衆を感動せしめたり午後四時散會

◎同年四月二十四日浦和町に於て開會の入間郡敎育會主催協議會及同月二十五日同町に於て開會の埼玉私立

敎育會主催の協議會へ本會代表者として幹事田島紋次郎、山脇傳太郎、評議員淺見慶三郎の三氏出席す同會の狀況左の如し

入間郡敎育會主催協議會狀況　四月二十四日浦和町山口清三郎方會場へ參會せるもの入間郡三名比企郡一名秩父郡一名兒玉郡三名大里郡一名南埼玉郡二名北葛飾郡一名計七團体十二名にして北足立郡北埼玉郡は參會せざりき午後九時開會入間郡敎育會代表者先づ開會の挨拶をなし且聯合敎育會組織に關する意見を發表せられたり其要領は各郡共郡敎育會の成立せる今日聯合敎育會の設立は最も必要と信ず就ては昨年熊谷町に開會せる協議會の決議に基き此際直に之を設立すべしと云ふにありて其會則草案を提出せり(會則案省略)此議に就き本會代表者は系統的聯合組織は時期尙早きを以て先づ現在の敎育團体聯合會を設くるを時宜に適したる者とせり其理由は團体の系統的ならざるべからざるは勿論にして昨年熊谷會に於て本會代表者の同意せる所なるも此組織は其單位たる各團体の組織健全なる場合に非ざれば決して十分なる活動を見る能はず近年各縣の聯合組織が往々失敗の實例を示せるは此點の注意を缺きたるに因る者の如じ然るに本縣各郡敎育會の現狀を觀るに入間郡を除くの外は或は創設に屬し或は其組織尙不健全なるが如く思はるゝ者もあり果して然りとせば斯かる薄弱なる團体を基礎として直に系統的團体を作るは決して策の得たる者にあらざるべし宜く先聯合會同の方法を立て各團体の聯絡を通じ縣全体に亘る問題につきては合同的行動をなす事とし其間に於て大に各郡敎育會の基礎を固め其健全鞏固なるに及びて系統組織とすべしと云ふに在り他の五郡の代表者も略ぼ同樣の意見なりしを以て左記の如き聯合會案を作り埼玉私立敎育會主催の協議會に提案する事を協定して十一時散會せり

敎育聯合會規則草案

一、縣下敎育團体の氣脈を通じ敎育の輿論を表明する爲聯合會を開く

一、聯合會は埼玉私立敎育會及縣下各郡敎育會を以て組織す

一、聯合各敎育會は五人づゝの代表者を選出し會議に列せしむるものとす

一、聯合敎育會に於て議決せし事項は各敎育會に於て實行する義務あるものとす

一、聯合會は各敎育會所在地に於て輪番に開き其地の

教育會之れが主催となるものとす

一、聯合會は毎年一回之れを開く

但臨時必要を生じたるときは當番の教育會の意見又は他教育會の請求により臨時會を開くことを得

一、聯合會に要する費用は各教育會平等に負擔するものとす

埼玉縣私立教育會主催協議會狀況　同月二十五日浦和町埼玉私立教育會事務所に參會せるもの同會より理事二名代表者三名入間郡三名比企郡二名秩父郡一名兒玉郡三名大里郡三名北埼玉郡二名南埼玉郡二名北葛飾郡一名計九團体二十二名にして北足立郡は參會せざりき午後五時半開會主催者開會の挨拶をなせり其要領は近來各郡共學事に關する團体を組織し教育の發達に盡力せらるゝに至り洵に喜ぶべき事なり此時に當り吾埼玉私立教育會が縣教育の機關となり各郡と聯絡を保ち縣教育の發達を圖らんとするには如何せば可ならんか是等の點につき充分諸君と協議を遂げ適當なる方法を定めて縣教育刻下の要求に應ぜんが爲此會を催せり但本會には何等の提案あるにあらざれば諸君の意見を遠慮なく披瀝せられたしと云ふにあり依て主催會長梶山氏を座長に推し各郡代表者順次其意見を發表せしに入間郡は其年來の宿論なればとて一應系統的組織の斷行を主張し其規則案を提出せしも他の各郡は皆時期尚早を唱へ山口屋協定案と其趣旨同一なりしを以て遂に是に一決し追て埼玉私立教育會主催となり改めて各郡教育會に謀り其代表者の協議會に於て會則を議定する事とし午後七時散會せり

●同年五月二日曩に擧行せる創立總會經費決算書を各評議員に配布し其部發起人の寄附金取纒め方を依頼す

●同年七月二十日幹事會を開き左の事項を處理す

一、明治三十六年度經費豫算に關する件

二、會費徴收に關する件

三、郡内小學校生徒成績物寄贈を請ふ件

●同日本庄尋常小學校に於て評議員會を開く出席員は東郷會頭各幹事鳥羽、橋本、貫井、上田、根岸、坂本、竹内、金井、松本、福島、福田、大木、肝付、山田、福島(元次郎)、須賀、秋山の各評議員にして左の事項を決議せり

一、明治三十六年度經費豫算に關する件

二、會費徴收方法に關する件

三、郡内小學校生徒成績物寄贈を請ふ件

●同年七月二十一日昨日欠席の各評議員へ決議事項を通知す

●同年八月二十七日各會員へ盆踊防止に關する件を通知す

●同年八月三十日盆踊に關する本會の方針を監督上參考の爲本庄警察署長及兒玉同分署長に通報す

●同年九月十八日幹事會を開き左の事項を處理す

一、幻燈映畫の製作並に同器械購入に關する件

二、生徒成績品寄贈期日、點數及表裝に關する件

三、部會出張員を幹事三名とする件

四、毎月一回幹事例會を開く件

五、常務幹事四名を置き本庄在住の者を以て之に充つる件

六、來る十月兒玉町に於て本郡農友會主催物産共進會開會の際本會の擧行すべき事業に關する件

●同年九月二十一日各學校生徒成績物寄贈の件を學校に照會す其要領左の如し

一、表裝は軸仕立とし一軸半紙十二枚貼りとする事

一、表裝費を節し体裁を齊一ならしむる爲便宜本會に於て調製する事とし費用は出來の上拂込を請ふ事

但一軸五拾錢を超へざる事

一、點數は兒童百人未滿一軸百人以上二百人未滿二軸二百人以上三百人未滿三軸三百人以上四百人未滿四軸四百人以上五百人未滿五軸五百人以上六百人未滿六軸六百人以上七百人未滿七軸七百人以上八百人未滿八軸とす但尋常高等小學校兒童數は兩科各別に計算する者とす

一、出品は來る十月五日迄に本會に到達する樣送附せらるゝ事但裁縫品は同月十五日迄とす

●同年十月四日常務幹事會を開き左の事項を處理す

一、會費徴收方に關し評議員に照會する事

二、成績品表裝に關する件

但書き方綴り方圖畫の表裝は一軸三十七錢の見積りとし裁縫品は物品到着の上表裝方法を定むる事

三、國語調査會より本縣を經て依頼の音韻及口語法取調を幹事に於て調査する件

四、會報第一號の發行期日及其体裁に關する件

五、會員へ告知に關する件

但告知事項は左の如し

(一)本會各部の學事に關する件は評議員より隨時通信せられたし

(二)教育に關係ある事實又は學説にして必要なる事項は會員より見聞の儘通信せられたし

(三)會員の投書は通例一行二十四字詰十行以内とす
但本會の意見として發表せんとする論文は此限にあらず
(四)兒童文藝の秀逸なる者を會報に掲ぐる見込につき學校長諸君より寄贈せられたし
(五)會報第一號は十一月中に編輯を了する見込に付前記三項四項の投書は同月十五日迄に郵送せられたし
(六)本會用幻燈映畫に適切なる材料あらば其實事なると考案だるとを問はず寄贈せられたし
(七)會員の入退會は其部の評議員に申出で評議員は其都度會頭に報告する事
●同年十月二十日常務幹事會を開き左の事項を處理す
一、本月二十五日音韻及口語法調査會を開く件
二、會員の募集は評議員に於て常に勸誘に注意する件
三、部會開會準備の爲左の件々を分擔整理する件
出席歩合比較圖を調製する事　戸塚書記
教育と体格との比較圖(三十五年壯丁檢査)を調製する事　三輪幹事
各學校兒童身体檢査統計圖を調製する事　山脇幹事
十五聯隊壯丁檢査体格累年比較圖を調製する事　田島幹事
尋常小學校對高等小學校就學歩合比較圖を調製する事　三輪幹事
兒童に關する古歌を集めて掛幅とする事　田島幹事
四、會報編輯事務に關する件
郡内學事統計表、各町村教育費比較表、校舍設備表等を調製する事
●同年十月二十五日音韻及口語法調査會を開く田島、山脇、三輪、羽田、島田、福田、吉川、の各幹事出席
●同年十一月一日音韻及口語法調査會第二回を開き調査を結了す出席員前回に同し
●同年十二月二十二日評議員會を開く出席者は東郷會頭茂木副會頭各幹事福島、上田、島田、橋本、肝付、福田、柴崎、吉川、秋山、小林、鳥羽、根岸、坂本、松本、神保、大木、荘田、山田、の各評議員にして左の事項を決議せり
一、埼玉縣聯合教育會に同盟の件
二、優良生徒表彰規定の件
三、部會開會日割の件
四、新暦正月實行の件
五、町村教育補助費を繼續せられん事を其筋に請願し縣會に建議する件
六、來學年より國定教科書を採用せられん事を其筋に請願する件
七、會費徴收に關する件
八、會員入退會取扱に關する件

小學校優良生徒表彰規程

第一條　本郡内小學校生徒にして左の各號に該當するものは之を表彰するため表彰品を贈與す
一、操行優良なる者
二、學業成績優良なる者
三、平素學業に勉勵する者
第二條　表彰生徒は各學校長に依囑して毎年三月其學校三四學年生徒中より選拔し會頭之を裁定するものとす
第三條　表彰生徒數は一學校の在籍生徒三百名迄一人三百一名以上六百名迄二人六百一名以上九百名迄三人とす
第四條　表彰品は本會總會式場に於て之を授與するものとす

第五條　學校長選拔報告書式は左の如し

優良生徒選拔報告

何々學校第何學年　氏名　生年月日
一　原籍、住所、父兄又は保護者職業續柄
二　操行の要領
三　學業成績の要領
四　學業勉勵の要領
年月日　學校長　氏名
兒玉郡教育會頭宛
●同年十一月二十四日音韻及口語法調査の結果を本郡長に答申す
●明治三十七年二月二十日幹事會を開き左の事項を處理す
一、優良生徒の選拔及生徒成績品の寄贈を學校長に依賴する件
但出品數は前年通りとし三十六學年度末成績を四月十五日迄に本會に到達する樣送附を請ふ事
二、優良生徒の賞狀案及賞品に關する件
三、會旗及高張提灯を作る件
四、戰時心得を會員に配布する件

五、會員の出征者に慰問狀を贈る件

●同年三月二十七日幹事會を開き左の事項を處理す

一、生徒成績品認め方に關する件

二、會員に配布する戰時心得に關する件

三、戰爭映畫購入に關する件

四、會旗に關する件

五、會員數精査に關する件

六、左の事項に該當する者の調査方を各町村長學校長に依頼する件

イ、現在就學兒童にして家族出征の爲就學猶豫を申出でたる者

ロ、新に就學せしむべき兒童にして同上の爲就學猶豫を申出でたる者

ハ、現在就學兒童又は來學年新に就學せしむべき兒童にして家族出征の爲町村の救護を受けつゝある者

本項は生計の狀況救護の等級金額等を附記する事

七、三十七年度經費豫算に關する件

●同年四月三日幹事會を開き左の事項を處理す

一、三十七年度總會費豫算案編製の件

二、同總會講師に關する件

●同年四月十日評議員會を開く出席者は東郷事頭各幹事橋本、秋山、貫井、根岸、吉川、柴崎、福田、田島、神保、松本、阪本、原、大木、飯島、福島(元次郎)の各評議員にして左の事項を決議せり

一、三十七年度總會を本月二十四日兒玉町に於て開會する件

但會場は講師の都合に依り已むを得ざる場合は本庄町に變更する事

二、講師は谷子爵又は大學教授戸水、寺尾、建部博士の内一名及婦人教育家一名とする件

三、來賓は知事視學官を招待する件

四、總會經費豫算設定の件

●同年四月十五日總會講師招聘の爲田島幹事上京す

●同年四月二十四日兒玉町兒玉尋常小學校に於て本會第二回總會を開く當日の概況左の如し

午前十時三十分より優良生徒表彰式を擧行し表彰品の授與會頭の演説參列員總代の祝辭生徒總代の答辭ありて十一時二十分式を畢る表彰生徒の氏名左の如し

本庄高等第四學年　官吏經太郎長男　原田貫一　明治二十三年七月三日生

同　農　せい長女　野口やす　明治二十四年三月三日生

本庄尋常第四學年　商　勘吉長女　富田ヨシ　明治二十五年三月生

同　第三學年　同　まさ次男　江原英一　明治二十七年六月七日生

同　同　保太郎長男　飯島幸太郎　明治二十七年六月二十二日生

藤田尋常高等科　第四學年　農　藤一郎孫　小山爆蔡　明治二十四年一月七日生

同　同尋常科第四學年　同　安五郎長男　關根正雄　明治二十八年一月十三日生

仁里尋常第三學年　同　滝次郎次男　小關勝次　明治二十八年一月一日生

旭　尋常第四學年　商　岩吉長女　巣山みつ　明治二十四年十月二十四日生

同　第三學年　農　貞太郎四男　飯田秋太郎　明治二十六年十一月二十一日生

北泉尋常高等科　第四學年　同　勘平二男　根岸高治　明治二十七年三月十五日生

同　同高等科第四學年　同　吉五郎長男　内田忠藏　明治二十年九月二十八日生

東兒玉尋常高等科　第四學年　村吏金十郎次男　國谷榮二　明治二十六年八月四日生

同　農　幾太郎長男　遠藤謙一郎　明治二十六年七月三日生

共進尋常第四學年　同　榮次郎長男　森貞藏　明治二十六年十月六日生

同　同　嘉藏姪　横堀トヨ　明治二十四年三月六日生

兒玉高等第四學年　同　十七吉五男　高橋直藏　明治二十三年四月三日生

同　商　善太郎三女　筑紫しげ　明治二十三年十二月二日生

兒玉尋常第四學年　同　倉吉長男　久米小三郎　明治二十六年七月十三日生

同　同　爲藏長女　關根むめ　明治二十六年三月二十五日生

第一金屋尋常第四學年　農　藤吉長女　田中しう　明治二十五年六月五日生

第二金屋尋常第四學年　同　彦太郎長男　杉山辰五郎　明治二十五年六月一日生

新里尋常第四學年　農　繼栖長男　田村一作　明治二十七年六月七日生

青柳尋常第三學年　同　武之吉四男　森伊助　明治二十八年二月二十二日生

阿久原尋常高等科　第四學年　同　熊太郎長男　櫻井整美　明治二十六年十一月二十四日生

渡瀬尋常第四學年　商　さだ孫　須藤新太郎　明治二十六年七月十五日生

本泉尋常第四學年　農　久太郎孫　井シモ　明治二十六年三月三十一日生

太駄尋常第四學年　同　元吉長男　中里修策　明治二十六年七月十一日生

上喜太尋常第三學年　同　源三郎次男　高野祐平　明治二十七年九月三日生

乾武尋常第四學年　同　くの孫　清水邦太郎　明治二十六年十月二十日生

七本木尋常第四學年　同　松次郎孫　山本モン　明治二十四年十一月二十日生

賀美高等第四學年　同　染吉長男　塚越倉吉

同　第三學年　明治二十一年八月二十四日生
同　利三郎五男　花形武平　明治二十三年十一月十三日生
長幡尋常第三學年　同　藤太郎三男　齋藤嘉謀　明治二十八年五月十七日生
丹庄尋常第三學年　同　近三郎長男　加藤道太郎　明治二十八年二月十五日生
同　同　吉藏長女　小林ヨシノ　明治二十七年一月二十日生
秋平尋常第四學年　同　松五郎長男　小茂田靜實　明治二十六年七月七日生
那珂尋常高等尋常科第四學年　醫師清平孫福島修一　明治二十七年五月六日生
同　同尋常科第三學年　農定吉長男　關根詮太郎　明治二十八年二月二十二日生
大澤尋常第四學年　同　七吉孫根岸宇平　明治二十七年六月十八日生

午前十一時三十分より前年度に於ける會務の報告をなし畢りて役員選擧會を開く其結果左の如し

副會頭　茂木小平君
幹事　田島紋次郎君　高萩龜太郎君　鳥羽正時君　三輪宰吉郎君　長坂乙治君　松本鶴太郎君　木村源次郎君　吉川由五郎君　福田直次郎君　島田安蘇太郎君

評議員

本庄町　小林濱次郎君　鳥羽正時君　藤田村　山田忠治君　長坂乙治君　仁手村　茂木安太君　橋本太君　旭村　卜部喜平君　秋山龜太郎君　北泉村　莊田萬五郎君　貫井角太郎君　東兒玉村　安齋謙三郎君　上田樂三郎君　共和村　荻野幸藏君　根岸伊十郎君　兒玉町　井田春太郎君　吉川由五郎君　金屋村　倉林元次郎君　島田安蘇太郎君　青柳村　高階恒久君　柴崎順一郎君　若泉村　原利平君　新田廣三郎君　本泉村　中里茂三郎君　島田順藏君　神保原村　竹內半三郎君　神保億二君　七本木村　金井丈吉君　松本鶴太郎君　賀美村　須賀丈太郎君　石原升太郎君　長幡村　坂本喜平君　松本彌平君　丹庄村　關根菊次郎君　福島德三郎君　秋平村　田中磯吉君　福田直次郎君　松久村　山田綱太郎君　大木臺三郎君　大澤村　福島元次郎君　肝付直矢君

午後一時三十分より演說會を開く傍聽者會員を合せ約七百名にして辯士及演題は左の如し

時局に就きて　帝國大學教授　法學博士　寺尾亨君
體育所感　女子高等師範學校教授　井口あくり君

第一席は約一時間第二席は約一時間半にして孰れも此際適切なる問題を極めて痛快に辯せられたれば聽衆一般深く感動せり

●同年九月二十五日幹事會を開き左の事項を處理す

一、未納會費調査の件
二、三十六年度經費決算調査の件
三、三十七年度經費豫算案設定の件
四、三十七年度本會事業に關する件

●同年十月九日評議員會を開き東鄕會頭各幹事、鳥羽、小林、長坂、橋本、貫井、上田、根岸、荻野、吉川、島田、柴崎、松本、福田、大木、福島(元治郎)山田、松本(彌平)島田(順藏)の各評議員出席し左の事項を決議せり

一、三十六年度經費決算認定の件
二、三十七年度經費豫算設定の件
三、本年度部會日割は幹事に於て設定する件
四、今回の戰役に關し召集せられたる會員の會費は召集期間免除する事とし追て總會の事後承諾を受くる件
五、高萩幹事の補缺は會頭指名とする件

以上五件の外左の五項に就き協議せり

一、郡內出征軍人中戰功ある者の幻燈映畫を作る事
二、會員にして出征中戰病死したる者には葬儀の際弔辭を贈り代表者を會葬せしむる事
三、會員の出征者に慰問を贈る事
四、今後の評議會員はなるべく土曜日午後とする事

四　會計

第一號

兒玉郡敎育會第一回總會經費收支決算表

收入之部

一金五拾七圓拾八錢　發起人七十七人ヨリ寄附金

支出之部

一金參圓　演說會場席料
一金九圓拾錢　來賓瀧市賃
一金四圓六錢　同畫賄費
一金八圓六拾壹錢　同夕賄費
一金貳圓　同休憩所席料
一金貳拾五錢　同茶菓子
一金參圓五拾貳錢　諸雇人足賃
一金貳圓　印刷費
一金壹圓六拾錢　來賓送迎車賃
一金參圓九拾四錢　來賓招聘ノ爲委員二回上京實費辨償
一金四圓拾錢　雜費
一金拾圓　來賓謝禮費
一金五圓　速記者報酬

計金五拾七圓拾八錢

第二號

兒玉郡教育會明治三十六年度經費收支豫算表

收入ノ部

科目	豫算額	決算額	附記
會費	三七〇・八〇〇	三五二・〇八〇	會員延一千九百卒六人分會費
計	三七〇・八〇〇	三五二・〇八〇	

支出ノ部

科目	豫算額	決算額	附記
旅費	三〇・〇〇〇	九・八〇〇	幹事出張四回旅費實費
手當	一二・〇〇〇	一一・一五〇	書記九圓平錢小使壹圓六十五錢
實費辨償	一〇・〇〇〇	九・三〇〇	幹事會評議員會辨當料九回分
備品費	八六・〇〇〇	一〇八・八〇〇	幻燈器六拾五圓同附屬品四圓七拾壹錢映畫三拾貳圓四拾六錢畫箱貳圓八拾錢印章五拾七錢會旗壹圓〇五錢提燈七拾五錢雜壹圓四拾六錢
消耗品費	一〇・〇〇〇	五・五八八	筆紙封筒四圓七拾八錢八厘木炭三拾五錢試驗用カーバイト四拾五錢
印刷費	七六・二〇〇	二五・三〇五	通知書七圓貳拾四錢會費切符三圓四拾三錢五厘國民心得拾三圓〇八錢牛徒賞狀五拾錢原稿用紙壹圓〇五錢
通信運搬費	三・〇〇〇	四・九七〇	郵便料貳圓貳拾六錢電報料四拾五錢脚夫賃貳圓貳拾六錢
生徒奬勵費	一四・〇〇〇	一七・九八六	賞品硯箱四十箇代金其他關係費用一切
部會費	一〇〇・〇〇〇	一〇〇・〇〇〇	部會二十箇所開會一箇所五圓ツヽ補助
雜費	五・〇〇〇	五・〇二〇	會費微收貳圓八拾錢借入金利子壹圓〇六錢評議員會幹事會用茶壹圓拾六錢
一時借入金償還	一二・四〇八	一二・四〇八	創立費ノ內借入金償還
豫備費	一二・一九二	一二・一九二	備品費其他豫算超過ノ費用ニ對シ支出
計	三七〇・八〇〇	三一〇・三二七	

科目	豫算額	決算額	附記
會費	三七〇・八〇〇	三五二・〇八〇	會員延一千九百卒六人分會費
計	三七〇・八〇〇	三五二・〇八〇	

支出ノ部

科目	豫算額	決算額	附記
旅費	三〇・〇〇〇	九・八〇〇	幹事出張四回旅費實費
手當	一二・〇〇〇	一一・一五〇	書記九圓平錢小使壹圓六十五錢
實費辨償	一〇・〇〇〇	九・三〇〇	幹事會評議員會辨當料九回分
備品費	八六・〇〇〇	一〇八・八〇〇	幻燈器六拾五圓同附屬品四圓七拾壹錢映畫三拾貳圓四拾六錢畫箱貳圓八拾錢印章五拾七錢會旗壹圓〇五錢提燈七拾五錢雜壹圓四拾六錢
消耗品費	一〇・〇〇〇	五・五八八	筆紙封筒四圓七拾八錢八厘木炭三拾五錢試驗用カーバイト四拾五錢
印刷費	七六・二〇〇	二五・三〇五	通知書七圓貳拾四錢會費切符三圓四拾三錢五厘國民心得拾三圓〇八錢牛徒賞狀五拾錢原稿用紙壹圓〇五錢
通信運搬費	三・〇〇〇	四・九七〇	郵便料貳圓貳拾六錢電報料四拾五錢脚夫賃貳圓貳拾六錢
生徒奬勵費	一四・〇〇〇	一七・九八六	賞品硯箱四十箇代金其他關係費用一切
部會費	一〇〇・〇〇〇	一〇〇・〇〇〇	部會二十箇所開會一箇所五圓ツヽ補助
雜費	五・〇〇〇	五・〇二〇	會費微收貳圓八拾錢借入金利子壹圓〇六錢評議員會幹事會用茶壹圓拾六錢
一時借入金償還	一二・四〇八	一二・四〇八	創立費ノ內借入金償還
豫備費	一二・一九二	一二・一九二	備品費其他豫算超過ノ費用ニ對シ支出
計	三七〇・八〇〇	三一〇・三二七	

差引殘金四拾壹圓七拾五錢參厘也

未納會費金貳拾壹圓四拾貳錢也

第四號

兒玉郡教育會明治三十七年度經費收支豫算表

收入ノ部

科目	前年度豫算額	本年度豫算額	附記
會費	三七〇・八〇〇	三九二・八四〇	會員千九十四人會費一人金參拾六錢
前年度繰越高	—	六三・一七三	金四拾壹圓七拾五錢參厘前年度繰越現金
計	三七〇・八〇〇	四五七・〇一三	金貳拾壹圓四拾貳錢會員延百十九人未納金

支出ノ部

科目	前年度豫算額	本年度豫算額	附記
旅費	三〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇	役員旅費
手當	一二・〇〇〇	一五・〇〇〇	書記小使手當
總會費	—	七〇・九八九	總會諸費
實費辨償	一〇・〇〇〇	一〇・〇〇〇	役員執務實費辨償
備品費	八六・〇〇〇	三五・〇〇〇	幻燈映畫七十枚貳拾壹圓、幻燈器械容器一箇參圓成績品容器二個六圓 幻燈器械修繕五圓
消耗品費	一〇・〇〇〇	一〇・〇〇〇	筆墨紙其他
印刷費	七六・二〇〇	八五・〇〇〇	六拾圓會報千二百部印刷費金貳拾五圓其他諸印刷
通信運搬費	三・〇〇〇	五・〇〇〇	郵便電信料脚夫賃
生徒奬勵費	一四・〇〇〇	一八・〇〇〇	郡內小學校優良生徒四十人表彰費
部會費	一〇〇・〇〇〇	一〇〇・〇〇〇	部會一箇所金五圓ツヽ
雜費	五・〇〇〇	五・〇二〇	雜費
一時借入金償還	一二・四〇八	一二・四〇八	豫算外ノ支出若クハ豫算超過ノ支出ニ充ツ
豫備費	一二・一九二	五三・〇二四	
計	三七〇・八〇〇	四五七・〇一三	

第五號

兒玉郡教育會第二回總會經費收支決算表

收入ノ部

一金七拾圓九拾八錢九厘	會費	

支出ノ部

會費	一〇〇・〇〇〇	一〇〇・〇〇〇 部會一箇所金五圓ツヽ
雜費	五・〇〇〇	五・〇〇〇 雜費
一時借入金償還	一二・四〇八	一二・四〇八 豫算外ノ支出ニ充ツ
豫備費	一二・一九二	五三・〇二四
計	三七〇・八〇〇	四五七・〇一三

金參圓七拾錢
金拾貳圓五錢
金四圓貳錢
金八圓五拾貳錢
金參圓六錢
金貳圓七拾錢
金五圓
金壹圓
金五圓七拾壹錢九厘
金貳拾五圓
金貳拾貳錢
計金七拾圓九拾八錢九厘

會場席料同手入工費並ニ敷物損料
講師車馬賃
講師來賓及接待員辨當七人分
同夕賄料八人分
講師及接待員本庄兒玉間車賃
普通人夫六人下足番二人賃金
速記者日當
休憩所茶料
役員辨當四十本其他雜費
講師謝禮
講師謝禮爲替料及郵便稅

兒玉郡教育會規則

第一章　總則

第一條　本會ハ兒玉郡教育會ト稱シ事務所ヲ兒玉郡本

庄町ニ置ク

第二條　本會ハ兒玉郡教育ノ普及振張ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第三條　前條ノ目的ヲ達スル爲メ本會ニ於テ施行スヘキ事業左ノ如シ

一、教育勅語ノ趣旨ヲ發揮スル方法ヲ講究シ其實行ヲ期スルコト

二、教育上ノ緊要事項ヲ研究調査シ其實行ヲ期スルコト

三、教育ニ關スル演說、談話、協議會ヲ開クコト

四、教育品展覽會ヲ開クコト

但實施ノ際ハ別ニ其規程ヲ設クルモノトス

五、教育上功績顯著ナル者及善良ナル學生生徒ヲ表彰スルコト

但實施ノ際ハ別ニ規定ヲ設クルモノトス

六、教育品陳列所及圖書館ヲ設立スルコト

但實施ノ際ハ別ニ規定ヲ設クルモノトス

七、臨時講習會ヲ開設スルコト

八、每年一回會報ヲ發行スルコト

第二章　會員及會費

第四條　本會ノ目的ヲ贊成シ本會維持ノ責ニ任スル者ハ何人タリトモ會員タルコトヲ得

第五條　會員ニシテ本會ノ目的ヲ支障スルカ又ハ會員タルノ義務ヲ缺ク者ハ評議員會ノ決議ニ依リ除名スルコトアルヘシ

第六條　會員ハ會費トシテ一ケ月金參錢ノ割合ヲ以テ每年六月十二月ノ二期ニ分納シ一旦拂込ミタル會費ハ退會ノ場合ト雖モ返還ヲ求ムルコトヲ得ス

但一時ニ金參圓以上ヲ納ムルモノハ會費ヲ徵收セス

第三章　役員

第七條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會頭　一名　一　副會頭　一名

一　幹事　十名　一　評議員　四十名

一　書記　一名　一　委員　臨時若干名

第八條　會頭ハ本會ヲ總理シ總會及評議員會ノ議長トナル

第九條　副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ之ニ代ル

第十條　評議員ハ本會ノ機務經費ノ豫算精算ヲ議定シ及其町村ニ關スル本會ノ會務ヲ分擔ス

第十一條　幹事ハ會頭ノ指揮ヲ受ケ事務ヲ處理ス

第十二條　書記ハ會頭ノ指揮ヲ受ケ雜務ニ從事ス

第十三條　委員ハ臨時調査事務ニ從事ス

第十四條　會頭ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ推薦シ其任期ハ三ケ年トス

第十五條　副會頭及幹事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ選擧シ其任期ヲ一ケ年トス

第十六條　評議員ハ各町村ノ會員中ヨリ二名ヲ選出シ其任期ヲ一ケ年トス

第十七條　委員ハ會頭之ヲ選任シ其任期ハ事務結了ト共ニ終ルモノトス

第十八條　書記ハ會頭之ヲ選任シ任期ヲ定メス

第十九條　役員ハ總テ無報酬トス

但書記ハ手當ヲ給シ又役員ニシテ會務ノ爲メ旅行スルトキハ其實費ヲ辨償ス

第四章　集會

第二十條　本會ノ集會ヲ總會部會評議員會ノ三種トス

第二十一條　總會ハ每年四月之ヲ開キ左ノ諸項ヲ擧行ス

但會頭ニ於テ必要ト認メタルトキ若クハ評議員會ノ決議アルトキハ臨時開會スルコトヲ得

一、會務ノ報告

二、教育上重要ナル事項ノ協議及演說談話

三、其他臨時ノ事項

第二十二條　部會ハ各部每ニ年一回之ヲ開キ演說談話其他必要事項ヲ擧行ス

但會期會場等ハ其部ノ評議員之ヲ定メ豫メ本會ニ報告スルモノトス

第二十三條　評議員會ハ會頭ニ於ノ必要ト認ムルトキ又ハ評議員五名以上ヨリ會議ノ目的ヲ示シテ請求シタルトキ之ヲ開ク

但議員三分ノ一以上出席スルニアラサレハ議事ヲ決定スルコトヲ得ス

第二十四條　本會ノ議事規則ハ別ニ之ヲ定ム

第五章　會計

第二十五條　本會ノ會計ハ幹事ノ中ヨリ會頭ノ選任シタル主任者之ヲ整理ス

第二十六條　本會ニ金圓物品ヲ寄附スル者アル時ハ會頭ノ名ヲ以テ謝狀ヲ贈リ其品目氏名ヲ臺帳ニ登載ス

第二十七條　本會ノ收入金ハ銀行ニ預ケ入レ之ヲ出納ス

第二十八條　寄附金及經常費ノ剩餘金ハ評議員會ノ決定ニ依リ基本財產ニ編入ス

但寄附者ノ指定アルモノハ此限リニアラス

第二十九條　基本財產ハ特別ノ事情アルトキハ總會ノ

決議ヲ經テ支消スルコトヲ得

第六章　雜　則

第三十條　本會則ハ總會ノ決議ヲ經ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

第三十一條　部ノ區域ハ町村ノ區域ニヨル

本會會員氏名

◎本庄町（二百十一人）

松本　文作　松本　純次　木村松次郎
鹽崎子之吉　岡田　熊吉　境野　芳藏
境野　喜六　田村桑太郎　田中長十郎
望月　久澄　丸橋　龜吉　山口文次郎
關口　龜吉　喜速金三郎　根岸　市次
內田仁三郎　三宅市太郎　森田庄三郎
中山　昇　森田藤四郎　高柳　只七
中澤　力　望月　久嶽　野崎　駒吉
若松　桑吉　小林濱次郎　宮下　林平
家高米太郎　西山晉五郎　清水　善平
鈴木清次郎　森田半三郎　家高文次郎
中原　貞齊　金井　善吉　大塚　豊作
武正　藤作　瀨山　榮吉　塚越伊三郎
山口福太郎　富澤　定七　若井　榮藏
出川　彦平　池田義之助　田中長太郎
木村三郎平　中村　藤吉　池田　平吉
中原　政七　渡邊勝太郎　伊藤清一郎
藤野平三郎　白石德二郎　茂木　善作
福島彦太郎　鶴卷　源吾　久保田　八十平
長谷部力藏　山崎　政七　織茂　幸吉
金井德二郎　清水　清作　東村　茂平
宮尾　英夫　丸山善太郎　宮本　信善
高橋太三郎　瀨山　銀平　中村梅太郎
中山　惠三　坂上彦太郎　荻原　元吉
富田　金藏　瀨山　茂吉　加藤新太郎
大塚　由藏　藤尾仙太郎　苅部　龜吉
青木德太郎　戶谷　千作　茂木　榮平
八木　菊七　藤井　信作　森　賢司
鳥羽　正時　丸山　嘉六　中村　安次
鈴木　光貞　常木　源平　町田　梅三
古川又三郎　杉山　半六　出口　嘉藏
柳澤勘次郎　磯崎菊治郎　井田　清平
橋本　鎌郎　瀨川東榮　高木清次郎
古川喜四郎　細野伊之松　宇野彌一郎
田澤七五郎　設樂　元司　青柳清太郎
森田　定吉　持田　直　五十嵐犬三
阪上卯之吉　森田　宗助　森田多美治
河野健三郎　內田榮次郎　井上竹次郎
內田　幸平　小林豊太郎　森田芳次郎
黑田　良助　森田英太郎　新井　文吉
戶谷八郎左衛門　戶谷　半六　早野寅五郎

松原　善八　岡田源次郎　高野直次郎
橫山長次郎　高柳　彌作　森田啓一郎
長島彌太四郎　大野　吉平　中野重太郎
長谷見萬平　櫛田　包保　福田　彌平
根岸丹次郎　持田　長吉　森田厚四郎
飯田友太郎　福島　嘉市　瀨山文次郎
河野　愛治　山崎龜次郎　鹿島　玄長
飯島保太郎　茂木新三郎　鴨田　甚平
石井　惣七　中塚　宗平　金井　春吉
關口萬三郎　藤井淺次郎　金井　武平
森山治壽慶　太田顯太郎　石原　秀諦
岩崎彦太郎　日向彌生治　日向周三郎
野枝　松藏　野枝鉉太郎　日向　兼吉
日向長五郎　日向丑五郎　日向　嘉平
山田保太郎　坂上　定吉　山田利三郎
五十嵐千代吉　細野由太郎　渡邊道三郎
秋和　伊平　田口　縫　茂木新三郎
東郷　重清　土田　每吉　田島紋次郎
引間　龜吉　山下東海夫　大谷富太郎
田邊　種弘　正田甲子太郎　諸井　逸郎
福島鹿次郎　鳥羽　豊作　安岡　忠吉
水上　美元　押川　錠八　山田　耕作
橫田　利平　境野　光八　木村　下ノ
萩原卷之助　須賀梅太郎　下總吉之丞
三輪宰吉郎　瀧　清太郎　戶塚和十郎
春山　藤米　久保田　太三郎　千葉　忠志
岩田仲次郎　吉田孝之丞　藤野　はな
逸見　宮吉　水上　萬作

◎藤田村（二八十七人）

山田　忠治　內野榮次郎　金井米三郎
矢島駒太郎　古暮誠次郎　金井　寅吉
松本午次郎　山田　敬作　森　謙太郎
千葉賢三郎　岡　善太郎　田口　辨作
關根安五郎　田口　正作　福島岩三郎
加藤友次郎　田村　文藏　內野彌三郎
內野愛次郎　內野辰三郎　吉井　與吉
內野　武　早野古三郎　早野　惠作
早野　繁次　島野　宇平　內田廣三郎
內田　周作　內野國五郎　飯島辨次郎
飯島　嘉平　飯島　彌平　松本　曉
松本松三郎　松本源五郎　長谷川宇市
野澤貞二郎　小川　半藏　相澤　元吉
森　浪太郎　森　萬五郎　平野　龜吉
丸岡甚五郎　岡　治三郎　岡　惣作
丸岡　宗藏　黑澤　太藏　高柳染五郎
高柳　市平　中西　爲吉　伊藤　桑吉
桑　佐五郎　戶塚彦三郎　木村八五郎
田沼延四郎　金井　總平　境野太三郎
須永　竹松　金井勝五郎　金井　龍藏

金井楙太郎　金井重五郎　金井庫吉
根岸半十郎　長坂　乙治　齋藤　滴水
小林　文作

◎仁手村（五十七人）

飯野　權平　新井熊五郎　福島孝三郎
中村　英作　龜井　與作　茂木　安太
内野　篤次　井上　武七　茂木　聲一
高柳　庄吉　大塚圓太郎　高橋　市松
五十嵐幸平　中野　和助　增田　明策
八木　周作　高橋　源作　淺久井　伊十郎
增田　專吉　石倉　庄平　武正菊太郎
小暮久五郎　小暮　幸平　小暮　角藏
小暮　喜市　武正秋五郎　坂上　積尊
坂上茂三郎　坂上角太郎　木村長太郎
小暮百平次　木村伊太郎　茂木　小平
鳥羽　幸平　茂木文五郎　茂木孝太郎
茂木　淺八　小關森次郎　阿久戸重平
鳥羽喜三郎　茂木平三郎　茂木　亮作
阿久戸國吉　茂木彦五郎　茂木仙次郎
橋本　太橋　島野鐘三郎　吉田　開作
富岡　宇平　細野治郎作　橋本辰三郎
吉田　忠　橋本藤太郎　森　軍平
福島幸三郎　志塚　政治　橋木　内藏太郎

◎旭村（四十七人）

戸塚　雄　鹽原治三郎　戸塚久太郎
鹽原百太郎　鹽原　伸二　織茂　常平
高橋　菊藏　井上　三郎　栗田久四郎
山本小四郎　今井賢太郎　大塚壽三郎
小林　半七　栗田佐四郎　關口幸治郎
五十嵐榮一　卜部　喜平　卜部德太郎
坂上磯五郎　長沼友次郎　吉田　和壽
尾高善太郎　杉　與市郎　久保清三郎
福島富太郎　渡邊安太郎　久保應次郎
茂木藤重郎　茂木　禧一　久保　禮作
植田菊太郎　茂木竹二郎　秋山龜太郎
鹽原　半吾　鹽原道三郎　鹽原重太郎
鹽原　濱吉　鹽原覺三郎　鹽原　半次
青木　半吾　吉野　安平　境野　太平
境野仙太郎　吉野　文吉　境野惠三郎
境野軒太郎　戸塚英太郎

◎神保原村（六十九人）

神保　億二　加島百太郎　高野源三郎
神保　權作　根岸　德治　金井肇太郎
阿佐美啓作　手計　久作　猪岡　綱平
金井　昌雄　高野乾太郎　岡部和三郎
田中光五郎　桑原　常衛　眞鹽鷲五郎
岩田　九平　竹内　萬平　竹内　雄治
竹内由太郎　岩田　清吉　岩田已之吉
山下勇太郎　根岸芳五郎　眞鹽　定平
荻原　良三　山下彌太郎　岩田　太重

新井　雄助　奥村　達三　小林　佐藏　間々田濱藏
竹内半三郎　竹内喜久治　山口福次郎　伊藤安五郎
齋藤　德治　竹内和三郎　福田作三郎　荒井富五郎
福田長十郎　齋藤濱五郎　栗原　丹治　荒井來太郎
福田　庄作　福田　清作　福田新太郎　塚越武三郎
福田佐源治　福田　半藏　福田　八郎　加川　福松
福田勘三郎　竹内　善作　須田　寅吉　飯塚完三郎
齋藤正太郎　敷地　周平　敷地半四郎　飯塚玉三郎
福田　倉藏　鈴木　政藏　須田　新作　荻野　龍平
茂木　林平　新井　新藏　桑原　忠藏　飯塚廣三郎
關口甲子太　栗原　清藏　新井百太郎　堀込　忠藏
山田　久藏　桑原　實平　松崎忠三郎　伊藤武五郎
武井　七藏　桑原彌之吉　木村秀五郎　伊藤六三郎
宮下太猪藏　小林　行吉　栗原新三郎　須賀　一九

◎賀美村（六十八人）

須賀　庄作　坂垣　保平　須賀　三朗　井上　三郎
小暮萬次郎　須賀伊三郎　松崎吉次郎　小此木正作
小暮　壽策　今井勝太郎　小暮　豐作　松本鶴太郎
小暮　庄作　板垣　三郎　今井作太郎　大林國三郎
岩田　與市　須賀新太郎　板垣仲次郎　角田鹿太郎
松崎嘉平郎　伊藤　辰藏　松崎　惣吉　神保卯三郎
須賀丈太郎　岩田　常松　須賀彌三郎　大澤　吉藏
岩田　忠平　清水善三郎　岩田源三郎　杉山源三郎
岩田　武平　中里源三郎　間々田廣吉　金井　寛一
間々田　政吉　間々田　新太郎　岩田　庄作　池田　與道
伊藤安五郎　荒井富五郎　加川　辰吉　飯塚玉三郎
赤沼　通藏　荒井來太郎　飯塚廣三郎　飯塚　泰助
塚越武三郎　荻原　眞平　飯塚玉三郎　荒井來太郎
加川　福松　加川　辰吉　荒井豐次郎　荻野　龍平
飯塚完三郎　飯塚玉三郎　荻原　文平　木村源次郎
荻野　龍平　飯塚廣三郎　八木茂太郎　伊藤武五郎
木村源次郎　堀込　忠藏　岸　定次郎　伊藤六三郎
伊藤武五郎　伊藤六三郎　小樽　久衛　須賀　一九
伊藤庫之助　須賀　一九　佐藤　ふさ　山田　慶藏
山田　慶藏　久保　盛治

◎七本木村（四十七人）

井上　三郎　小此木正作　谷ヶ崎貞吉　町田　桂作
松本鶴太郎　松本　佐平　金井　丈吉　村山喜三郎
大林國三郎　高橋廣治郎　小沼織太郎　荒井豐次郎
角田鹿太郎　橋爪　良平　田端勘九郎　荻原　文平
神保卯三郎　橋爪力太郎　橋爪小源太　八木茂太郎
大澤　吉藏　高橋助五郎　杉山　好文　岸　定次郎
杉山源三郎　杉山喜太夫　齋藤勝五郎　小樽　久衛
金井　寛一　渡邊清三九　久保　喜平　佐藤　ふさ
池田　與道　黑澤　金作　横村　賴作　山田　慶藏
金井　寅吉　横田　喜市　茂木　貞助　久保　盛治
平塚　清吉　角谷春太郎　戸谷　治平
木村清五郎　立川九一郎　齋藤精次郎
岡村　民司　野崎龜太郎　荻原　柳吉
關根　七郎　坂本　良作　岡村紋三郎

坂本直次郎　河副卓三
沼上十郎　島崎林二　黒澤正三郎

◎長幡村（四十八人）

阪本喜藏　岡田健吉　松本彌平
川田源作　齋藤兵藏　齋藤幹
松本恒吉　齋藤榮吉　戸谷大太郎
田中半太郎　谷爲吉　新井力藏
相川守治　堀込喜三郎　新井貞治
吉野佐七郎　坂本章次郎　堀込鉉一郎
坂本高助　坂本孝一郎　坂本兵三郎
清水市作　坂本繁三郎　中久木盛太郎
中久木甚三郎　關口太平　坂本秀延
馬場武平　塚越源三郎　清水季次郎
川田縫太郎　塚越常藏　清水直吉
川田盛善　塚越常吉　杉山仲五郎
伊井松藏　立石半五郎　相川孫太郎
立石一猪　庄荒三郎　赤見源作
庄品五郎　小林藏六　飯塚柳平
須田奥三　安藤昌甫　梅林千穀
久保田甚太郎

◎北泉村（五十人）

荻原藤太郎　飯島彦平　田所榮七郎
須藤角三郎　小暮儀三郎　立野藤吉
儘田亭三郎　芦澤累作　高山安一
高山政吉　高山淺吉　久保田豊太郎
門倉茂吉　石川友八

戸谷長次郎　笠原多十郎　石川安太郎
石川毛三郎　鈴木關太郎　荒井仙重郎
荒井喜代作　荒井藤太郎　島田和三郎
井田市藏　小暮儀平　小暮周藏
小暮品藏　關口文吉　關口梅藏
佐久間茂十郎　根岸市五郎　莊田萬五郎
貫井角太郎　久保田次郎吉　久保田鹿松
笠原常松　原仙三郎　大谷由五郎
原敬夫　櫻井幾太郎　莊田利三郎
莊田三郎衛　萩原奎五郎　井上犬太郎
井上幸太郎　莊田善一郎　高田福太郎
飯塚宗吉　茂木永助

◎東兒玉村（四十七人）

春山正兵衛　櫻澤廣治　木村萬藏
木村市太郎　上田樂三郎　關根眞太郎
山崎通三郎　山崎房五郎　春山五郎次
黒澤とし　國谷金十郎　清水辨三郎
清水鶴吉　清水武平　飯島宗治
春山儀平　藤野熊吉　長谷川源太郎
長谷川多市　高橋力藏　柳澤寅治
遠藤幾太郎　中澤照吉　齋藤彌五郎
渡邊正壽　田中格太郎　下山正作
岩本善一　須永泰太郎　須永半三郎
下山八百藏　田端周藏　田端覺三郎
久米延松　上山三郎平　飯野惣次郎

櫻澤恭三郎　關根百一郎　平野文太郎
安齋謙三郎　井澤長平　笠間貞三
細村佐市　宮澤睦次郎　名倉數馬
中里半兵衛　矢都木勉藏　主山亞三郎
中島行三郎　中山道德
逸見友次郎　根岸彌
岡本延平　野澤九作
高橋近義

◎共和村（五十人）

增野理平　增野清三郎　增野賢太郎
淺見政五郎　鈴木德太郎　鈴木忠太郎
矢崎九平　矢崎長太郎　高橋保平
鈴木彦十郎　鈴木儀平　横堀松五郎
田邊近太郎　田邊森三郎　岡芹和市
柴崎茂十郎　吉田吉平　岡芹九藏
茂木正作　岡芹鶴五郎　高橋松次郎
鈴木一眞　根岸伊十郎　岡芹恒平
荻野美世作　荻野正三郎　高橋佐平
渡邊島吉　福島寅次郎　福島澳太郎
荻野物平　中原竹太郎　荻野幸藏
荻野虎之助　篠塚英嶽　田島卯太郎
福島榮太郎　吉田久平　田島豊三郎
中壹太郎　菅沼良　菅沼源五郎
荻野平兵　關根平三郎　小賀野佐平治
關根啓太郎　野本又市　山田清八
山田保之助　鈴木清重

◎兒玉町（三十一人）

菅沼源作　中神菊藏
井田春太郎　川部琴次郎　櫻井清次郎
新井力藏

日向源作　中神貞作
青木雄太郎　島田伊豫太郎
中村文太郎　中村高樹
吉川由五郎　高山三郎
江原玄之助　牧田椎松
大山沖太郎　吉羽よね
阪本百次郎　市川駒吉
福島要作　上山はな
新井太喜

◎金屋村（三十四人）

倉林元次郎　清水貞吉
大島富士太郎　長田鵬助
賀加野俊三　關根喜太郎
倉林周助　倉林辰五郎
倉林菊次郎　飯島幸太郎
岡登幸三郎　鹽谷仲次郎
小峯源次郎　田村市作
谷田彖三郎　小松幸三郎
大塲九平　杉山政重
松井登作　杉山佐市郎
森田道太郎　鈴木茂平
丸山筆治

◎丹莊村（五十一人）

關根菊治郎　福島昌三郎
塚越權六　松井多三郎

倉林周平
島田安藤太郎
倉林治平
倉林一三
飯島莊藏
清水嘉藏
關根茂登吉
富岡六三郎
杉山儀市郎
清水宇市郎
田沼章平

福島德三郎
福島都三郎

福島　幸吉　坂田　龜平　坂本和三郎
荻野力之助　小林惠之吉　松原　平作
福島　泰助　荒木　玉八　福島半十郎
澁谷　嘉藏　金井源五郎　坂本又三郎
福島　富藏　金井　實平　小林斧五郎
肥丹　眞吾　鹽田染太郎　吉田　兵松
山田田之吉　山田喜一郎　五十嵐　芳太郎
茂木　計　茂木勝太郎　福島吉太郎
大島喜三治　大澤八百藏　大澤　新吉
根岸　利助　關口　利平　關口貞市郎
松永　廣信　山崎善次郎　川野　力藏
設樂　今城　落合新三郎　落合孫四郎
岡野　政吉　岡野　半藏　岡野辰五郎
岡野駒次郎　須川　常吉　新井　島藏
澁谷光五郎　小暮清次郎　長田　省三

◎青柳村（二十五人）

木村　九藏　木村豐太郎　山田庄三郎
浦部建次郎　田村町五郎　青木勘次郎
町田安次郎　主山　善作　柴崎　春吉
橫山　勇藏　戸谷鷲五郎　宮下　嘉六
戸谷鐵五郎　柴崎仙太郎　新井　春吉
金鑽　宮守　百田　師道　茂木竹次郎
高階　恒久　柴崎順一郎　新井彌三郎
浦部良太郎　矢鳥鍋五郎　橫田　文藏
中山　佐敎

◎若泉村（五十五人）

淺見　熊藏　四方田　淺次郎　淺見　卯八
淺見　勇作　淺見　舍興　四方田龜吉
四方田武時　松本　幸七　四方田　國太郎
淺見慶三郎　淺見學三郎　新田廣三郎
淺見　鼎　新井千代吉　柚木　富
貫井清三郎　貫井　茂吉　新田　明慶
柴崎鹿猪作　柴崎儀兵衛　清水　定藏
新井彖三郎　設樂　善作　原　鐵五郎
原　利　平　原　金三郎　山口又四郎
田中伊之吉　田中宗三郎　笠原　義平
山口勝三郎　山口　良作　小林國三郎
前田　喜市　若林　倉吉　原　菊藏
金子　惠壽　須藤　良作　須藤　朋平
須藤八郎次　大谷平三郎　落合辰五郎
大谷勘十郎　櫻澤　福松　田中市太郎
須藤　庄吉　須藤榮太郎　大谷　彌吉
福島　磯松　福島　愛藏　福島千代吉
中村　道三　逸見千代次　光田　堯惠
田中桂太郎　櫻澤柳太郎

◎本泉村（三十三人）

阪本一喜平　嶋田　順藏　設樂梅五郎
中里清一郎　中里　富士太郎　茂木　清平
茂木善一郎　中里　定吉　中里仲次郎
櫻井角太郎　山下部泰作　茂木　鎌吉

宮崎善一郎　木村彌三郎　木村喜代平
木村德兵衛　木村彖三郎　坂本　兵右衛門
峰　國太郎　坂本友次郎　笠原　近藏
松本　隆恭　今井宇太郎　今井　武司
金井　寅吉　今井光太郎　中里茂三郎
木村　喜治　木村　軍平　木村　孫平
石森文治郎　木村　金八　吉田　藤助

◎秋平村（三十五人）

田中　磯吉　小柏丹次郎　福田直次郎
根岸勝五郎　根岸　武平　根岸　武次郎
福田　兵衛　福田松五郎　根岸錄三郎
飯野　宇市　飯島喜三郎　飯野伊三郎
飯嶋力五郎　大澤定五郎　飯嶋茂重郎
小茂田　磯五郎　吉川　鍋六　田中　林作
高柳　忠助　根岸　與八　吉野秋五郎
田中　北雄　吉野　萬治　小茂田　熊太郎
堀口友次郎　福嶋仲次郎　根岸　卯平
間正　宇平　海北　久作　堀口權太郎
堀口福次郎　根岸嬉三郎　吉田　酉松
堀口　丈吉　間正　友吉　根岸　吉作

◎松久村（四十五人）

山田綱太郎　丸山茂十郎　大木臺三郎
清水千賀吉　根岸　久作　今井清三郎
大澤　己吉　加藤利三郎　角田慶之助
內田　盛藏　佐藤愛之助　鈴木　清作

◎大澤村（三十五人）

福島元次郎　岡田清重郎　根岸愛次郎
上田　辨藏　林　今太郎　小船　牧藏
清水仙太郎　吉橋　直衛　丸山　近吉
松本峯次郎　片山和十郎　田端　留吉
根岸幸太郎　淺見武市郎　關口　九藏
卜部　蓁堂　中兼清次郎　櫻井　穗波
卜部　藤八　神岡　常七　飯野幸太郎
肝付　直矢　田端　宗平　內田　欣作
岡本新三郎　神岡　順次　高田　誠
井上　浦治　內田　東平　秋山鐵三郎
石川　榮藏　杉田和重郎　野口　與七
田島金四郎　新井　契次　飯野高次郎
福島榮太郎　市川　勘藏
小野澤光藏　深澤榮太郎
根岸　章作　小野澤仙五郎
古川愛次郎　丸山　政吉
岡本喜次郎　福島　友藏
卜部浪三郎　清水　作治
卜部實之助　角田　新作
宮澤　善藏　中嶋　國作
關口　倉吉　木村　治登三郎
小林　權重　岡崎　正作
小林　兵松　小林　兵松
白石多三郎
中島筆五郎
鈴木　定吉
卜部龜太郎
根岸　熊平
岡本　順平
持田和十郎
根岸達四郎
鈴木信太郎
小林儀三郎
相馬安五郎

庫用
書館内

明治三十七年十二月二十日印刷
明治三十七年十二月二十五日發行
〔非賣品〕

兒玉郡教育會
埼玉縣兒玉郡本庄町

印刷者　河野梢
埼玉縣北足立郡
浦和町百七十三番地

印刷所　埼玉活版所
埼玉縣北足立郡
浦和町百七十三番地

庫用
書館内

1302

70.5